

プロレスが 死んだ日。

ヒクソン・グレイシー VS

高田延彦

20年目の真実

集英社インターナショナル

プロレスが死んだ日。

ヒクソン・グレイシー VS 高田延彦

20年目の真実

プロローグ

「プロレスは真剣勝負か、ショーか」

いまでは、そんな論争が湧き起こることもなくなった。プロレスを八百長呼ばわりする者もいない。

それはリアルファイトである総合格闘技と、肉体エンターテインメントとしての価値を有したプロレスの住み分けが明確になったからである。リアルファイトを前提としているからこそ、「八百長ではないか」という疑念が生じるのであって、肉体エンターテインメントであるプロレスに、八百長も何も無い。

プロレス会場を訪れる。たとえば年始の新日本プロレス1・4東京ドーム大会。そこに殺伐とした空気は漂っていない。むしろ、アーティストのコンサート会場のような明るい雰囲気醸されている。或るいは、WWE（ワールド・レスリング・エンターテインメント）の会場と同じ雰囲気だ。居心地は悪くない。でも、それは同じプロレスという名が冠されていても私が子どもの頃から愛し続けてきた「昭和のプロレス」とは確実に異なる。

緊張感が無い。あるのは、ウキウキ感、楽しさだ。私が子どもの頃の夢中になったプロレスは、すでに、この世に存在していないのである。でも、それは決して悪いことではない。闘いに緊張感を求める場所がプロレスから総合格闘技へ移ったというだけのことなのだ。

昭和のプロレスが大好きだった。

金曜8時が、待ち遠しくて仕方なかった。

プロレスラーという存在は強さの象徴であり、私たちに生きる勇気を与えてくれた。決して大袈裟ではない。〃燃える闘魂〃アントニオ猪木の異種格闘技戦に熱狂し、自分も猪木とともに世間と闘っている気持ちになっていた。その後UWFに夢を見る。至高の間だった。

だが、そんな幻想は、時代が昭和から平成へと移り間もなくして崩されてしまう。

バーリ・トウード、アルティメット、総合格闘技という言葉が叫ばれる中で、プロレスというジャンルは、最強を決める闘いの舞台ではないことが明確になってしまったからだ。

世紀末、プロレス界は揺れに揺れた。

プロレスを信じたい。

いや、現実を直視するべきだ。

その狭間でファンの心も揺れに揺れた。

いつしか、最強の称号は、グレイシー柔術に冠されていた。

プロレスが最強を名乗るのであれば、グレイシー柔術を倒さねばならない。ファンは、プロレス界から誰がグレイシー一族最強の男ヒクソン・グレイシーに挑むのかに注視した。無視しよう。

そんな動きもあった。

グレイシー一族が席捲する総合格闘技とは一線を画すことでプロレスを守ることができると考えるレスラー、団体関係者もいたのだ。

だが観る者は、より刺激的な闘いを求める。グレイシー一族とプロレス界の遭遇は避けられない状況にあった。

そんな中、突如、ヒクソン・グレイシー×高田延彦戦の決定が発表される。

20年前のあの時ほど、プロレスファンが熱くなったことはなかった。プロレスを信じる者も、UWFだけは信じたいと想う者も、プロレスを信じるのをやめた者も、UWF信者をやめた者も皆が緊張した。

そして、1997年10月11日、東京ドーム『PRIDE.1』ヒクソン×高田戦の結果によって、プロレスが新たに進む路が明確化されたのである。

プロレスが死んだ日。

そこに至る過程、以降の流れを含めて、私が知る限りの真実を綴る。

目次

プロローグ

3

第1章 嵐の船出

11

第2章 「プロレス体験者」

45

第3章 1988リオ・デ・ジャネイロ

75

第4章 グレイシー VS UWFインター

97

第5章 山籠り

123

第6章 「冷たい雨」

151

第7章 再戦

183

第8章 フェイク

209

第9章 息子の死を乗り越えて

239

エピローグ

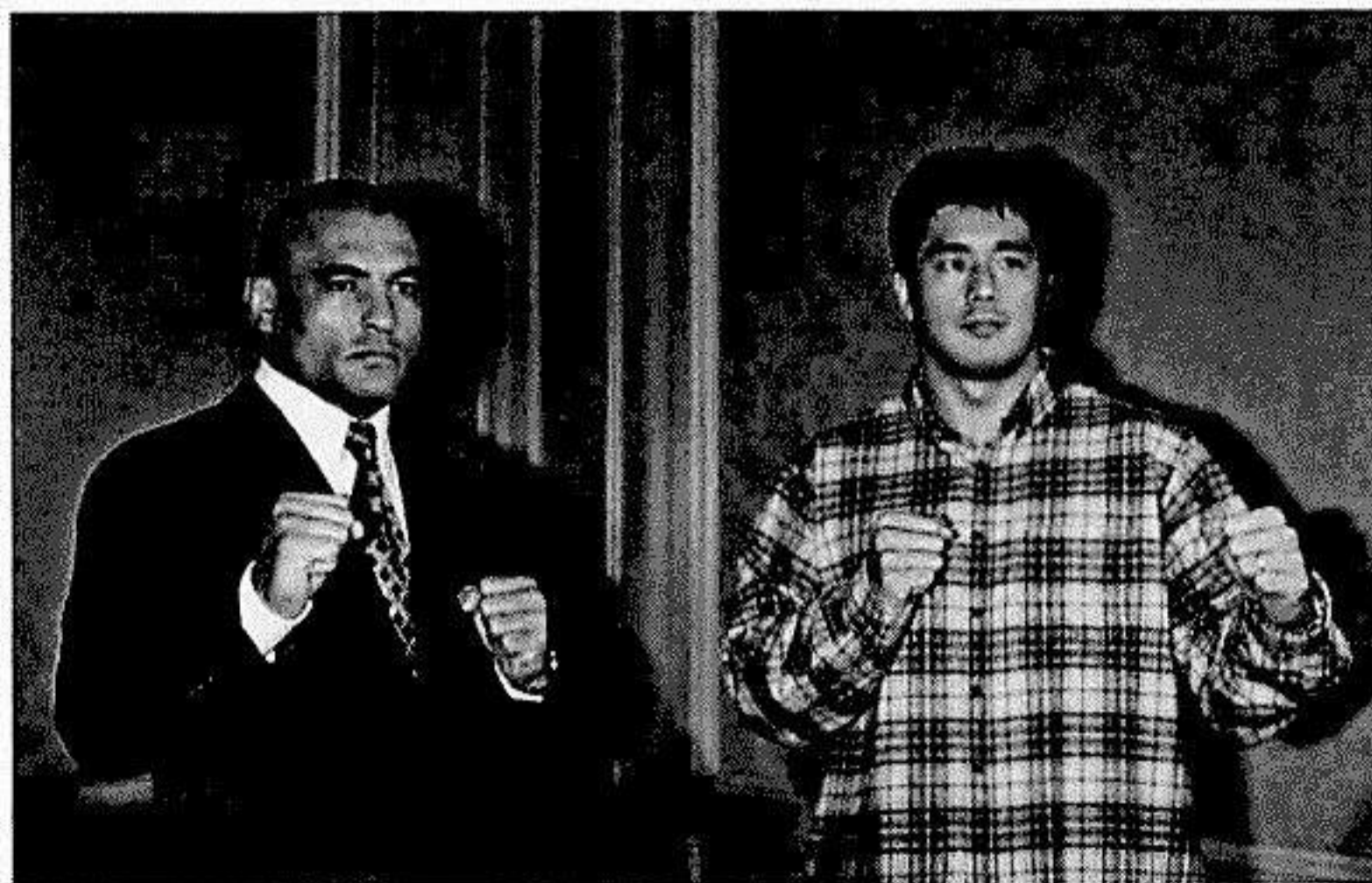
264

装丁・本文デザイン 伊藤明彦 (iDept.)

写真 真崎貴夫、スラムジャム

嵐の船出

第1章



流れた8・15東京ドーム

「8月15日、東京ドームで高田がヒクソンと闘うことに決まったらしい」

そんな話を聞いたのは、1997年の4月の終わり、ゴールデンウィークに入った直後のことだった。同じ時期に、その情報はプロレス、格闘技メディアに広がる。すると記者や関係者から、さまざまな噂、声が耳に入ってくる。

「大会を主催するのは、キングダム（高田が所属したUWFインターナショナルの後継団体）ではないらしい。名古屋のイベント会社が動いている」

「前田日明も動いていたみたいだが、そっちは話がまとまらなかった。名古屋のイベント会社の女性社員とヒクソンの奥さんに繋がりがあって、ヒクソン×高田戦実現に向けての話が一気に進んだようだ」

「すでにヒクソンにはファイトマネーの一部が渡されている。3000万円。ということだけはファイトマネーは1億円に近いということだ。高田にも1000万円が支払われている。だからこの試合、流れることはないよ」

「ヒクソンは、いくら積まれても負け役を引き受けるつもりはないらしい。ということとは、この試合は、やっぱりシユート（リアルファイト）だ。それでよく高田がやる気になった

よな」

「日本テレビで放映されるかどうか瀬戸際のようにだけど、メドがついたから東京ドームを
押さえたのだろう。もしかするとテレ東（テレビ東京）になるのかもしれない」

「5月の第2週に記者会見が開かれる。5月7日にヒクソンがロスアンジェルスを発って
日本に来るらしい」

後になって思えば、その時点において正しい情報もあったし、的外れなものもあった。

その予定はあったのだが、ヒクソンは5月7日にロスアンジェルスを発たなかったし、
5月の第2週に記者会見が開かれることもなかった。ただ、8月15日に格闘技イベント開
催のために東京ドームが押さえられていたことは事実だ。そして、大会を計画した者たち
は、この日に、ヒクソン×高田戦を実現させるつもりでいた。

だが結局のところ5月、6月に大会開催の正式発表はなく、8月15日にヒクソン×高田
戦は行われなかった。

「何か知ってますか？ 高田とヒクソンの試合について。もう飛んじやったんですかね。

どうも名古屋のイベント会社（H²Oカンパニー）が中心になっていたんじゃないかと、K-
1やUインター（UWFインターナショナル）のイベントに携っていた東海テレビ事業の榎
原（信行）という男が精力的に動いているらしいんですよ。プロレス関係者じゃないから
伝手がなくて。何か知っていることがあったら教えてもらえませんか？」

旧知のスポーツ紙の記者から、6月の終わりに、そんな風に言われた。

「いや、詳しいことは何も知らないよ」

そう答えると彼は言った。

「ヒクソンの方から何か情報が入っているんじゃないですか。本当はいろいろ知っているんでしょ？ でも教えてくれないんですね」

違う。本当に私は何も知らなかったのだ。ヒクソンとは親交はあったが何も聞いていなかった。

8月15日に予定されていたヒクソン×高田戦が中止ではなく延期で、10月11日、東京ドームで開催されるのを知ったのは7月に入ってからである。その後、『週刊フアイト』紙と『東京スポーツ』紙に、「高田×ヒクソン戦実現」と報じられる。

そして、7月20日にヒクソンが来日。2日後の22日火曜日に、ホテルニューオータニ・シリウスの間で記者会見が開かれ、ヒクソン、高田が同席の下、両者が10月11日、東京ドームで対戦することが正式に発表されたのだ。大会名称は『PRIDE.1』と決まっていた。

プロレスマスコミを中心に大勢の報道陣が集まった。

そこにヒクソンと高田が、わずかに緊張した面持ちで登場し、カメラマンが放つフラッシュを浴びながら握手を交わした。

世紀の一戦がついに実現する。

にもかかわらず、ヒクソン、高田両者に対して報道陣からそれほど多くの質問は飛ばなかった。

「人生を懸けて私は闘っている。とにかく勝つ」

そうヒクソンは話し、高田も、こう応えた。

「やっと来たかなというのが実感で、非常に長い長い一年だったかなと。ヒクソンには燃える炎のようなものを感じます。場合によっては進退を懸ける覚悟でリングに上がる」

この会見の場でルールも発表された。それは次のようなものだった。

- ・ 選手の体重はフリーウェイト制とする。
- ・ オープンフィンガー8オンスのグローブを互いに着用する。
- ・ シューズを着用してもよいが、その場合、キックを放つことは認められない。
- ・ ラウンド形式で試合を行う。5分×12ラウンド。ラウンド間のインターバルは2分間とし、12ラウンドで決着がつかない場合は引き分けとする。
- ・ 次の行為は反則とする。噛みつき、頭突き、目潰し、金的攻撃、頭髪を掴む、脊椎への攻撃、肘打ち、倒れている選手に対しての蹴り（両手両足のうち3点以上がマットに接地している相手に対しての足による打撃攻撃）、故意にロープを掴む、リング下に相手

を投げる、リング下に逃げる。

・ロープエスケープは認めない。

・試合の勝敗は以下の状況で決定する。

①ノックアウト⇨ダウンと同時にレフェリーがカウントを数え、10に至った時にファイティングポーズが取れない場合は負けとなる。フリーノックダウン制ではあるが、ラウンド終了のゴングが鳴らされた場合でもカウントは続行される。

②一本勝ち⇨ギブアップの意思表示は口頭で行うか、マット或るいは相手のカラダを3回以上叩く。

③テクニカル・ノックアウト⇨レフェリーが危険と判断してストップするか、選手のセコンドがタオルを投じた場合はTKOとする。

④失格⇨反則を犯したり、レフェリーの指示に従わなかった場合、「注意1」が課せられ、再度、反則を犯した場合には「注意2」となり失格負けとなる。レフェリーが、明らかに故意の反則と判断した場合は、一度目で失格負けとなる場合もある。

・アクシデントにより選手が怪我をして、リングドクターが診断、試合続行不可能と判断した場合には、試合はノーコンテスト（無効試合）となる。ただし、反則攻撃にお

ける怪我の場合は、反則を犯した者が敗者となる。

またファイトマネー以外に、勝者には2000万円が贈られることも、この場で発表されている。

ヒクソン、高田が同席しての記者会見は20分ほどで終わった。2人は席を立つ。しかし、これで終わりではなかった。この後、主催者サイドと報道陣の間で激しいバトルが繰り広げられたのである。

嵐を呼んだ記者会見

集まった報道陣の中には、スポーツ新聞社のプロレス担当記者も当然いた。長年プロレスを取材しているベテラン記者たちだ。

彼らが主催者に対して激しく噛みついた。

「KRSとは何か？」

まず、その点をプロレス担当のベテラン記者たちが突く。

KRSとは、主催団体として記されていた名称である。

KRSは格闘技レボリューション・スピリッツ。つまりは、『PRIDE.1』を開催す

るにあたり、それを動かし支える有志の集まりとされていたのだが、具体的に企業名を挙げろと記者たちから迫られたのである。

これまでに東京ドームというビッグキャパシティでボクシング、プロレス以外の格闘技イベントが開催されたことはなかった。かなりの人気を得ていたK-1ですら、この時点ではまだ、東京ドーム進出は果たしていなかったのである。そんなスーパーイベントを一体、誰が、どの企業が仕切っているのかを記者たちは知りたかった。

だが主催者サイド、つまりKRSは、具体的な企業名は挙げなかった。なぜならば、取り敢えずはヒクソン×高田戦を正式発表したものの、運営に関しては決まっていないうことが多過ぎたからだ。この会見の後に賛同してくれる企業を得られる可能性もあったし、不確定なことは公にしたくなかった。だから、まずは、ヒクソン×高田戦というファンが望んでいるスーパーファイトの実現だけを発表し、KRSに関しては、この一戦に賛同した有志ということにとどめたかったのだ。「ヒクソン×高田戦決定」というビッグニュースを正式に発表することで、まずはメディアにも好意的に受け入れてもらえるという予測も主催者サイドのKRSにはあったように思う。

でも、そうはいかなかった。プロレスマスコミの追求は執拗だった。声を荒らげる記者もいた。

あの場に立ち合っていて私は思った。

2つのことが摩擦を生じさせている、と。

一つは、「プロレス村」のルールである。

当時、スポーツ新聞に掲載されるプロ格闘技といえは、相撲、ボクシング、プロレスの3つだった。これらは多くの場合、担当記者が異なっている。つまり、プロレス担当記者は常にプロレス団体取材していたのだ。修斗などの格闘技団体もあったが、それらは特別なイベントを開催する時（たとえば、94、95年に開催された『バーリ・トゥード・ジャパンオープン』）以外は、ほとんどスポーツ紙では報じられていない。

要するにプロレス団体、選手、それを取り巻くメディアの間で「プロレス村」が形成されていったのだ。

私も『週刊ゴング』（日本スポーツ出版社）記者時代に、プロレス取材を数年間、体験した。だからよく解るのだが、プロレスメディアは、プロレス団体に対してジャーナリストイックな目を向けることはない。両者は共存共栄の関係にあった。だからそこに、プロレス界の既得権益を侵されたくないという考えも生じるのだ。

プロレス団体が繁栄しているところに、新参者が『PRIDE.1』を東京ドームで開催すると表明する。

「何者だ？」

「俺たちの商売の邪魔をするつもりか？」

そうプロレス団体の経営幹部たちは訝^{いぶか}しむ。そんな彼らの代弁者となってプロレス担当記者たちは、『PRIDE.1』の主催関係者に襲いかかったのである。

見切り発車の記者会見では、主催者サイドが劣勢を強いられた。取り敢えずは、ヒクソン×高田戦の正式決定を発表したのだが、イベント的には何も決まっていなかった。たとえば試合開始時間、テレビ放映の有無、アンダーカード（メインのヒクソン×高田戦以外の試合）については発表できなかつたのである。

険悪な雰囲気の中で記者会見は終わった。

メディアは『PRIDE.1』の開催に対して肯定的でも協力的でもなかつた。そのことは翌日のスポーツ紙の紙面に表れる。ヒクソン×高田戦という格闘技界のスーパーイベントの決定が正式発表されたにもかかわらず、紙面での扱いは小さいものだった。それだけではない。記事の内容も、既存のプロレス団体に配慮するかのようにながていぶな言葉が並ぶ。その一部を抜粋してみる。

へ世紀の一戦は、スポンサーやテレビ局との契約、8000万〜1億円といわれるヒクソンのギャラがネックとなり、なかなか決まらなかった。今回はパーフェクTV、電通のバックアップで記者発表にこぎつけたが、主催者の実態がはっきりしない上、チケット販売、ほかのカードなどすべて未定、会場となっている東京ドームさえ、「まだ何も

決まっています」と、開催が確定とは言えない状況。ヒクソン戦にすべてをかける高田の思いが本当にかなうのか。疑問が残る記者会見だった。Ⅱ『日刊スポーツ』紙（97年7月23日付）

（ヒクソン・ 그레이シーと高田延彦の一騎打ちをメインにした格闘技イベント『PRI DE.1』（10月11日、東京ドーム）の開催が22日、都内ホテルで正式発表され、両選手が握手を交わして対決を宣言した。同大会は電通、メディア関連会社のバックアップのもとにエンターテインメント分野の有志が集まったKRS（格闘技・レポリューション・スピリッツ）実行委員会が主催するが、試合開始時間、チケット料金、前売り発売日も未定で、見切り発車の開催発表となった。

大会は8試合程度が組まれる予定で、武輝道場の北尾、キングダムからも金原らの参戦がウワサされる。だが会見ではアンダー・カードはもとより有力出場選手の発表もなく、メイン以外のカード編成に不安を残した。テレビ放送は衛星放送のパーフェクトTVで全試合生中継される方向で、地上波については交渉中と説明。8・15大会が中止延期されたのもビッグ・スポンサーが降りたことが大きな要因になったという。今回も予定されていた有力スポンサーが直前で降板したともいわれ、主催者の歯切れは悪かった。

暗礁に乗り上げながらも一年がかりで両雄をそろい踏みさせて開催発表にこぎつけた

ものの、開催日まで三ヶ月を切った段階としては運営面の立ち遅れが懸念される。Ⅱ
『デイリースポーツ』紙（97年7月23日付）

へところで高田とヒクソンが退席後、主催者の『KRS』と報道陣の間で「番外戦」が繰り広げられた。

『KRS』という組織の実体はつきりとしらない上、この日の会見でもチケットの料金や発売日、アンダーカードなどに関して一切触れようとしないうため、「どうなっているんだ？」とマスコミ陣が詰め寄ったもの。

だが、それでもラチが明かず、主催者側は「交渉中」「未定」と、あいまいな返事を繰り返すばかり。『PerfecTV』が完全生中継を行うことは判明したが、局名、また地上波（テレビ東京？）での放送の有無は明らかにならなかった。

参加企業数も「現段階で6〜7社」とはつきりしない有り様。後日、『KRS』から送信されたファックスによると、『KRS実行委員会』には今のところ7社が参画。その中には、幻となった8・15東京ドームのプロデュースを担当した名古屋のイベント会社『H₂Oカンパニー』も含まれている。Ⅱ『週刊フアイト』紙（97年8月7日号）

通常、新たなイベントを立ち上げる場合、まずはメディアを味方につける、というのが

セオリーである。好意的に報じてもらい、ファンの興味を煽りたいとイベント主催者は考
える。だがKRSは、この時まだ、そのやり方を知らなかったし、また、そうできる状況
にもなかった。

以降KRSはメディアと敵対することも多く、『PRIDE.1』は逆風の中、開催へと
向かうことになる。

高田が語ったこと

この記者会見から1週間後の7月29日、高田が所属する団体キングダムは、東京・国立
代々木競技場第二体育館で『BIRTH STEP 3』と題した大会を開催している。U
WFインターナショナルが崩壊した後^に結成されたキングダムは、97年5月4日、国立
代々木競技場第二体育館で旗揚げ戦を行っており、これが3度目の興行だった。ヒクソン
との対決を念頭に置いていた高田は、旗揚げ戦、そして2戦目にも出場していない。この
7・29代々木大会でも試合をすることはなかったが、会場には姿を現した。

試合開始前に売店横に座り、Tシャツ購入者に対してサイン会を行った。ヒクソンと闘
うことが決定したことで高田に対する注目度はさらに高まっていて、売店には長蛇の列が
できていた。

そしてリングにも上がった。この日の第1試合開始時間は19時だったが、その15分前の18時45分にリングイン。上半身裸になり、ムエタイ戦士ボーウイ・チョー・ワイクンが構えるミットに強烈な蹴りを放つデモンストレーションを敢行。その後、腹筋運動をこなし、公開練習を終えた。

リング上でマイクも手にした。

「今回も試合を休むことになりました。すみません。今度闘う相手は非常に強い選手なので、こちらの状況を相手に対して少しでも知らせたくありません。こんなつまらない練習しか見せられないことを許してください」

この後、報道陣に囲まれた高田は、こうも言った。

「二日の練習時間は1時間、毎日ボトル2本はあけている。そう書いておいてください
（笑）」

勿論、これはおとぼけで本当のことではない。この場で高田陣営は、今後の調整状況をヒクソン陣営に知られたくないので練習は非公開とする旨をメディアに伝えている。

また、このキングダム代々木大会の2日前に、高田は『東京スポーツ』紙の記者からのインタビュー取材を東京・港区東麻布にあったキングダムの事務所で受けている。その際の主なやりとりは以下の通りだ。

——（7月）22日にようやく念願のヒクソン戦開催が正式発表されたが、いまの気持ち
は？

高田 うーん、この1年間は長かったような短かったような。ただ、当初決定していた
8月15日の大会が流れた時は、張りつめていたものがプツンと切れた。立ち直るまでに
2〜3週間は何もヤル気が起きなかつたよ。

——立ち直れたのはヒクソン戦実現に向けての執念ですか。

高田 そうだね。1から10まで説明するといくら時間があつても足りないけど、純粹に
まっさらな気持ちでヒクソンという人間に興味を持ったということだね。

——きっかけはやはり、安生（洋二）がロスアンジェルスのヒクソン道場で返り討ちに
遭つたことなのか？

高田 それはないとは言えないが、きっかけのほんの一部に過ぎないよ。

——あの時、「なぜ高田はすぐにアダ討ちに立ち上がらないんだ」という批判もありま
したが……。

高田 あの時はオレ自身、アルティメットというものに対して一切興味がなかつたから
行かなかつただけ。それだけだつたね。

——いまやストーリーカーバリの急変ぶりだが、その後何があつたんですか？

高田 あれからヒクソンは『バーリ・トウード・ジャパン』を連覇するなど、何かブームみたいにもてはやされた。嫌でも彼に関する情報が目や耳に入ってくる中で、ヒクソン・ 그레이シーという個人に対して非常に興味を持った、ということだね。

——400戦無敗の男の鼻をあかしてやろうじゃないか、と。

高田 そういうんじゃないよ。彼に対しては何か、尊敬する部分があるんだよ。日本人が忘れかけた趣、侍のような精神を彼は持っている。純粹に、そんな男と闘ってみたいと思ったんだ。勿論勝てば、自分にとってこれ以上ない自信になるしね。

——そういう男と、ヒクソン圧倒的有利のルールで対戦するわけで、勝算はありますか？

高田 なければやらないよ。それにヒクソンとバーリ・トウード・ルールはセットだと考えている。一緒になければやる意義はないし、勝つ意味もない。

——対策は？

高田 ヒクソンの攻撃パターンは、どんな相手でも同じ。やるべきことは何でも取り入れてやっっているつもりだ。

——対戦の正式発表記者会見では、「負ければ引退」と受け取れる発言もしていたが……。

高田 勝つためにやるんだよ。だから引退はない！ とにかく結果がどうであれ引退な

んで考えていない。

——ヒクソン戦の勝負のポイントは？

高田 精神面。オレにとってまったく未知の分野だからね。当日、オレがいかにかにニュートラルな気持ちでリングに上がれるか、それに尽きるよ。リング上を舞うチリの一つひとつが見える。それくらいの精神状態で上がればいけるんじゃないかなと思う。

——そうは言っても10カ月ぶりの試合。しかも世紀の大一番。大丈夫ですか？

高田 そんなこと心配していたらキリがない。それより、自分は10カ月も一つの試合に向けて集中できたとプラスに考えている。

——その「VIP待遇」のせいで5月に旗揚げしたキングダムファンに対しては多大な迷惑をかけたようにも思うが……。

高田 そういう人は、10月11日、東京ドームに来てくれよ。

——ファンに歴史的勝利をプレゼントするということか？

高田 そういうこと。

——ところで、リングスの前田日明選手は、「もし高田が負けたら次はオレが行く」と話しているが……。

高田 何をいまさら……。いま、そんなことを言うんだったら、何で山本（宜久^{よしひさ}）がやられた時にすぐに行かなかったんだ。いつでもやれるタイミングはあったはずだ。そん

なのただのリップサービスでしょ。

——前田は盛んに「プロレス界を食いものにするグレイシーはほっとけん」と言っていますが、高田選手もそう思っていますか。

高田 悪いが、そういうものは一切ない。どんなスタイルのものが強いか、ではなく「誰が強いか」だよ。何度も言うが、オレはそういう部分でヒクソン個人に興味を持つただけだ。

このインタビュ―は97年7月29日付『東京スポーツ』紙に掲載された。

以降、10・11東京ドーム決戦まで、高田がメディアの前に姿を現すことはほとんどなかった。

97年8月のヒクソン

8月の半ば、私はカメラマン、映像スタッフと3人で米国カリフォルニア州ロスアンゼルスに飛んだ。ヒクソンを取材するためである。

日本ではちょうど「お盆」にあたる時期。取材が決まったのが8月に入ってからだ。飛行機は、どの便も満席状態とのことだった。それでもスタッフが何とか工面してく

れて、3人が同じ日に別々の便で成田を発った。

8月はカリフォルニアも暑い。でも、日本の暑さとは随分と違う。湿気はそれほど無く空気はカラッとしていて心地好い。ヒクソンの故郷、リオ・デ・ジャネイロと気候が似ているようにも思う。

ロスアンジェルスに着いた日は、キモとタンク・アボットに会いインタビュー取材を行った（アボットは候補選手ではあったが、結局のところ『PRIDE 1』には出場しなかった）。ヒクソンのインタビューは、その翌日に行った。

ロスアンジェルス国際空港近くのホテルから車で10番のフリーウェイをサンタモニカ方面に向かう。濃青の空には雲ひとつなかった。陽射しがまぶしい。サンタモニカでフリーウェイを降り、サンセット・ブールバードを北西へと進むとパシフィック・パリサデスという街に入る。そこの閑静な住宅街にヒクソンの家はあった。

どれくらい面積があるのだろう、庭も含めると敷地はかなり広かった。プライベートプールもあり、ゆったりとした間取りの部屋が幾つもある2階建ての住居。そこにヒクソンは当時の夫人キム、長男のホクソン、次男クロン、長女カウアン、次女カウリンと6人で暮らしていた。

「ようこそ」

そう言ってヒクソンは笑顔で我々を迎え入れてくれた。

通されたりビングルームで少し寛いだ後、私はヒクソンに尋ねた。

「今日は、道場で何時頃から練習するのか？」
すると彼は答える。

「道場へ行く予定はない。本当は今日はビーチでカラダを動かそうかと思っていたんだ。でもインタビュアーが長時間にわたるようなら、ずっとここにいても構わない。任せるよ」
ならば、先にビーチで写真撮影をし、その後、ヒクソンの家に戻ってインタビュアー取材をしようということになった。

「OK！ いい場所がある。私の車で行こう！」
そうヒクソンに言われ、私たち3人は彼の車に乗り込んだ。

ヒクソンは3週間前に来日し、高田との対戦発表記者会見に臨んだ。僅か3日の滞在だったが、表情は、いまと違って穏やかではなかった。そのことを話すと彼は言った。

「正直に言って、ちよつと疲れたね。記者会見の後に個別のメディアインタビューが結構、多くあったから。同じ言葉を繰り返すのは疲れるんだよ（笑）。こっち（ロスアンジェルズ）に帰ってきてきてちよつと落ちついた」

サンタモニカのビーチは、その日が土曜日だったこともあり、どこも人で溢れていて、落ちついて撮影取材ができる状況にはない。ヒクソンは40分ほど車を走らせた。そして車を停める。

着いて驚いた。

サンタモニカのビーチはあんなに多くの人で賑わっているのに、そこには誰も人がいなかったからだ。

ヒクソンは道衣に着替え、私たちはスチール（写真）とムービー（映像）の取材を同時に開始する。時刻は午前11時。陽射しが強過ぎるほどの好天。額に汗を浮かべながら約20分間の撮影が終わりかけた頃にヒクソンは言った。

「ちよつと泳いでもいいかな」

道衣を脱ぎ捨てショートタイツだけの姿で海岸沿いを10分ほど走る。続いて柔軟体操。独特なやり方でカラダをほぐしていく。その間に腹部を極度に凹ませる呼吸も行う。約15分、存分にカラダに柔軟性を宿した。

その後、一步一步、砂浜を踏みしめるようにして海水に足から身を浸していく。天候と比例して波が穏やかなわけではなかった。波は、かなり高い。サーフィンが趣味だというヒクソンは、「いい波だよ」と笑っていた。

だが、すぐに表情から笑みは消え、今度は波に向かってファイティングポーズをとり始めた。ヒクソンが試合開始直後に見せる、顎を少々上げて両手を前方に突き出す独特の構えだ。いつも、そうやって海に向かっているのか、それとも我々取材陣のカメラに対するサービスだったのか、その辺りは解らなかった。ともかく波に向かって闘いを挑むように

して海へと入っていった。

「あの岩まで泳いでくる」

ヒクソンは指をさしながら私にそう言った。

波打ち際から200メートルはあるだろう場所に岩は顔を出していた。

泳ぎ始める。波はかなり高い。

彼の行く手を阻むように大波がやってくる。何度も何度も、その波にヒクソンのカラダが押し戻されている。どれほどの時間がかかっただろうか、ヒクソンは何度も何度も波に呑み込まれながらも岩へと辿り着いた。

岩の上に立つ褐色の肌のヒクソン。

彼は両腕を広げて天高く上げる。そこを身長よりもはるかに高い波が襲う。ヒクソンの姿は、完全に波に吞まれて見えなくなった。

波が過ぎるとヒクソンは再び岩へとよじ登る。そして、また波の中に消える。4度、5度とヒクソンは、波に吞まれながらの岩登りを繰り返した。

ふと気づくと、2人の白人男性が私の隣に立っていた。彼らはセーフガードだった。そして私に言った。

「駄目じゃないか。あんな所まで泳がせちゃ。危険だぞ」

どうやら彼らは、私たちがヒクソンの撮影をしていたことを理解していたらしい。オレ

ンジ色のライフジャケットを上半身に装着していた2人は、海に向かって歩き出した。そして急に足を止める。

ヒクソンが、こちらに向かつて泳ぎ始めたからだだった。沖へ出る時は、かなりの時間をかけて泳いでいたが、帰りは波に押されたせいだろうか、意外なほど早く波打ち際まで戻ってきた。

「危ないじゃないですか。やめてくださいよ。あんな所まで、この波の中で泳いでいくのは」

セーフガードの男が、砂浜を歩き始めたヒクソンに、そう話している。

ヒクソンは笑っていた。

「大丈夫さ、ここは俺の庭みたいなものなのだから」

ふと私は視線をヒクソンの足に向けた。

僅かではあるが臍すねの辺りから血が滲み、それが少したれている。岩か何かで足を擦り剝いたのだらう。

「危ないんですよ。ここは波も高いし、そのうえ岩だらけなんだから。だから、ここでは皆、泳がないんですよ。いつも言っていますけど」

どうやら、そう話すセーフガードの男とヒクソンは顔見知りのようだった。

ヒクソンは笑いながら、

「大丈夫さ」

と面倒臭そうに、もう一度言った。

その後私の方を向いてヒクソンは笑いながら言った。

「いつものことさ。こんなのは怪我じゃない。これくらいは日常のことだから心配されても困るよ」

自然を好み、その中でも水を好む。

ナチュラルなものが一番だ、は彼の口癖でもある。

「我々人間は誰でも、どこかで暮らすことになるのだが、ならば私は、水の傍そばで生活したいと考えている。海岸沿いの街に住むのであれば海の近くであり、山の中で暮らすのであれば川の近くにいたいとずっと思っているんだ。

いま住んでいる場所を決めたのも、近くに海があったからだよ。

ブラジルにいた頃は、常にそうだったからね。海の傍でずっと過ごしていた」

ヒクソンは時間があればビーチに出て、また自宅のプールでもよく泳ぐ。水と戯たわむれるのが大好きなのだ。泳ぐことが肉体のバランス強化に多大に役立つことは、いまや広く知られているが、戦場でのヒクソンのバランス感覚は抜群だ。では、あのグラウンドでの目を見張らされる体重移動の巧みさは、泳ぐことによつて、その礎が築かれているのだろうか。

そのことを帰りの車中で問うと、ヒクソンは首を振った。

「ちよつと違うね」

そして続けた。

「私は水の中に入って泳ぐことが大好きだ。でも、それは、肉体を鍛えるためにやっているのではない。水に接するということは、肉体的にどうの、バランス感覚がどうのということではない。もっとスピリチュアルなものだと私は考えている。水に浸ることで自然が持っている力、自然が持っている神秘……そういうったものに触れることができるんだ。そのことこそが重要だと思っている」

「私はフエイクが嫌いだ」

「お腹が空いたな。ランチを食べよう」

そう言ってヒクソンはサンドウィッチハウスの駐車場にワゴン車を滑り込ませた。時計の針は午後2時に近づいていた。そこは、どうやらヒクソンの通いつけの店らしかった。

いつものを頼む、といった感じで、ウェイターに声をかける。十数分後にテーブルに出てきたのは、ボリユーム満点のチキン&ビーフサンドウィッチだった。フライドポテトとサラダも添えられている。ヒクソンは無表情のまま、まずポテトを摘んで口に入れた。

彼の仕草を見ながら、私は以前にヒクソンの兄であるホリオンと、弟であるホイスから

聞いた話を思い出していた。

「グレイシー・ダイエット」の話である。

ホリオンとホイスは口を揃えて言った。

「私たちグレイシーファミリーは皆、食生活にも十分な注意を払っている」と。

ホイスの説明によると、グレイシー・ダイエットとは次のようなものだった。

「炭水化物を多く含むもの、特に穀類を2種類以上、一緒に食べてはいけないんだ。たとえばライスとポテト、ヌードルとポテトという組み合わせでは食べない……これは基本だ。あと一日3食のうち2食はフルーツを食べ、一食だけ料理を食べる。でもフルーツを食べる時も一種類だけにしなければいけない。オレンジだったらオレンジだけを食べる。何個食べても構わないけどオレンジしか食べてはいけない。私は一食で、16個食べるね。細かいいえば、もつといろいろとあるけれど大体、そういう食事法なんだ。

食べてはいけないものも決まっている。ビーフやチキンは食べるけどポークは絶対に食べないとかね」

その食事法の根拠については、「解らないけど、父さんや兄さんたちも皆やっているし、そうすると胃が重くならないから気分がいいんだ」とのことだった。

ヒクソンにも、グレイシー・ダイエットについて聞いてみた。

「勿論、知っている。食事面にも私は十分に気を配るようにしている。アルコールは飲ま

ないし煙草はやらない。それに食べ過ぎも良くない。期間を決めて体調を整えるために食事調整をすることはある。でも普段は肉でも魚でも何でも好きなものを食べているよ。特にフルーツは好きだね。まあ、基本さえ崩さなければ、食に関しては、それほどナーバスになる必要はないんじゃないかな」

そう話しながらヒクソンは、チキン&ビーフサンドウィッチを美味しそうに頬張っていた。

食事を終えてヒクソンの自宅に戻る。

リビングルームのソファに腰を下ろして、「さあ、何でも聞いてくれ」というようにヒクソンは私に視線を向けた。

まず、高田との対戦を決めた理由について尋ねてみた。前田日明からも、また、それ以外の団体からもオファーは届いていたはずである。その中からなぜ、高田との闘いを選んだのか？

「私は自分が、すでにチャレンジャーの立場にいないと思っっている。だから誰かと闘いたいという強い欲求は持っていない。ただ私にチャレンジしたい、『お前よりも俺の方が強い』と言う者がいたならば闘うことは拒否しないつもりでいる。

でも、その場合でも条件がある。

私はフェイクが嫌いだ。だから、そのようなものにはかかわるつもりはない。そして闘

この場合はニュートラルであることを求める。ルールはバーリ・トウードだ。また闘いの舞台は、ビッグな会場、出場に価するイベントであることを求めたい。今回、KRSは、フアイトマネーも含めて私の条件を満たす提示をしてくれた。だからマエダよりもタカダに興味を持ったのではなく、プロのファイターとして闘うことを決意したんだ」

ヒクソンの言葉を、少し噛み砕いて説明しておく必要があるだろう。

リアルファイトを謳いながら、実はあらかじめ勝負が決められている試合というのは過去に幾つもあった。プロレスも、リアルファイトだと信じて観ている人が多かった時期もある。70年代、80年代に行われた異種格闘技戦も、ほとんどがそうである。

たとえば、76年2月6日、日本武道館で行われた異種格闘技戦シリーズ緒戦となるアントニオ猪木×ウイリエム・ルスカ戦。「オランダの赤鬼」と称されたルスカは、72年ミュンヘン五輪で93キロ超級、無差別級の両方で金メダリストとなった当時の柔道界最強の男である。この「プロレスVS柔道」の対決をリアルファイトだと信じて観ていた者も多かったが、実はそうではなかった。多額のフアイトマネーと引き換えにルスカは負け役を引き受けていたのである。そのことは後にルスカの証言からも明らかになっている。

プロレスのリングで行われてきた異種格闘技戦は、そのほとんどがプロレスラーのステータスを引き上げるものであり、柔道家、ボクサー、キックボクサーらが負け役を演じていた。フアイトマネーと引き換えに競技者としての魂を売ったともいえる。ヒクソンのも

とにも、そんなオファーが間接的に複数回届いていたが、当然のことながら、それらをすべて断っていた。「いくらお金を積まれても、それだけはやらない」というのが彼の信念だったのである。その姿勢は現役引退まで貫き通されている。

また、「闘いの場はニュートラルであることを求める」とは、敵の土俵には上がらないということだ。対戦相手の所属している団体のリングで闘うことはニュートラルではないという考え方である。当時でいえば、リングス所属の選手とリングスの興行で試合をする、或るいはパンクラスのリングでパンクラス所属の選手と闘うことは避けたいというわけだ。第三者であるプロモーターがつくり上げたイベントのリングで闘うことで中立性が保たれるという主張である。ただ、レフェリングの中立性が守られるならば、その限りではないともヒクソンは考えていた。

そして、「闘いの舞台は、ビッグな会場」であることにも、ヒクソンはこだわっていた。数万人単位の観客が集まる会場で闘いその試合がテレビ中継されることで自分をアピールでき、満足のいくファイトマネーを得られる。プロフェッショナルなファイターとして闘う以上は、それは当然のこと。そうでなければ、敢えて闘う必要はないとの主張を貫いた。

ルールについても尋ねた。

5分12ラウンド、インターバルは2分。オープンフィンガーグローブ着用。ロープブレ

イク、相手がダウンしている状態へのキック、脊椎への攻撃、目潰し、金的攻撃、頭突き、頭髪を掴むこと、オイル・ワセリンの使用、シューズ着用時のキック……これらはすべて禁止。加えてロープを故意に掴むことも禁じられる。この中で気になるのはラウンド制が導入されたことだが、と問うとヒクソンは言った。

「バーリ・トウードというのは本来、ラウンド制など用いず、時間無制限で闘うものだ。だから本当は、時間無制限の闘いの方がいい。でもこれは、私とタカダ側が歩み寄って決めたことだから納得している。お互いに可能な限り譲り合うことも必要だろう。そうしないと試合が成立しない。それでも基本的にはバーリ・トウードの原則は守られたルールになったと思っているよ」

1ラウンド5分というタイムリミットについては、どうなのだろうか。それと12ラウンドではなく、ラウンド数を無制限にしたいとは考えなかったのだろうか。

「5分が長いか短いかといえば、短いと思う。でも、時間無制限でも5分でも、考え方によつては同じことさ」

それは、高田に勝つには5分もあれば十分という意味なのだろうか。その問いには答えず、ラウンド・ノーリミテッドというのも面白いな、と言って笑っていた。

だが対戦相手の高田のことをヒクソンは甘く見ているわけでは決してなかった。高田を、というよりは闘いを、である。その証拠に日本での記者会見を終えて帰国して以降、ヒク

ソンは道場での指導クラスを閉じ、自らのトレーニングに専念していた。闘いに対しては常に真摯な姿勢を崩さない。

自らにかかっているプレッシャーを吐露したのは、彼の息子、長男ホクソンに話を向けた時だった。この時、ホクソンは15歳。ヒクソンから柔術の手解きを受け、幾つかの大会にも出場していた。私は、息子に自分の後継者になってももらいたいと考えているのかと問うた。

少し考え込んだ後にヒクソンが口を開く。

「柔術はもうすでに教えているし、これからも教えていくつもりだ。おそらくホクソンは強い柔術ファイターになるだろう。だが、バーリ・トウードをやるかどうかは自分で決めることだ。やりたければやればいいと思うし、そう思わなければやる必要はない。

柔術の試合とは違って、バーリ・トウードのチャンピオンであり続けるということは凄くプレッシャーのかかることなんだ。プレッシャーを背負いながら生きていくことを息子に強制するつもりは、まったくくない。

いまだって私は試合のことを考えない時はない。試合が決まれば、その時から、いかに完全な状態でリングに上がれるように持っていくか、そのことばかりを考えている」

そこまで話して、ふと我に返ったようにヒクソンは話すのを一度やめた。そして続ける。「私はファイターだから、いつも死に直面している。だが不安は無い。私はリングの上で

は機械と化しているのだから。闘う時は、いつも自分自身を神に捧げているんだ。だから、それ以降の私のことは、すべて神が決めることなんだよ。神が私が勝つことが相応しいと思えば、私を勝利に導くだろうし、そうでないと思えば、私は、その試合を最後にリングを下りることになるだろう。もしかしたら人生を終えることになるかもしれない。私は、いつも自分を神に捧げて闘っているんだ。

バーリ・トウードを始めた頃は、まだそういう気持ちになれていなかった。何時いつからなのかは正確には思い出せないが、闘いを重ねていく中で徐々に、そういう気持ちが芽生えてきたんだ。それは闘いだけではなかったのかもしれない。何かに対して真剣に立ち向かう時には常に気持ちの中に恐怖がある。恐怖心を持つこと、恐怖に立ち向かうこと、恐怖を乗り越えて次のステップに向かうこと……そんなプロセスを何度も繰り返すうちに自分のカラダは単なる機械に過ぎないと悟るようになった。大切なのは自分の精神であり、自分の霊であり、自分の人生の持ち主、つまりは神であると。

そういったことを考えていると常に闘いの中で自分は成長していけるのだと思う。知性のある者なら、恐怖は誰もが感じるものさ。だから私は、いつも死を覚悟して闘っている」

カリフォルニアの太陽が斜かたむきかけていた。

私は最後に、ヒクソンにこう質問した。

ところで高田の試合のビデオは観たか、と。

「観たよ」

そう短く答える。

観た感想は？

そう問うと、しばらくの間、彼は黙っていた。その後、口を開く。

「相手の試合の映像があれば当然、観るよ。これはタカダと闘う際に限ったことではないが、私は、それは一度しか観ない。一度観るのは、相手の雰囲気や闘気を感じ取るためだ。でも、もう一度観ようとは思わない。それは必要以上の情報を得たくないからだ。」

だって、そうだろう。私がビデオテープで観たことを当日の試合で相手と同じようにやってくるわけではない。だから自分の中に相手のファイトイメージを固定させることは得策ではないんだ。闘いにおいては、相手どうこうではない。どんな形で相手が仕掛けてこようとも、それに対応できることが大切。つまりは、自分の闘いができれば勝てる。そのことを信じるのみだ」

話を聞いた後、数秒間、私が黙っているとヒクソンが、「だけど……」と言った。……
「だけど、何？」

そう問い返すと、かすかに笑みを浮かべて、言うべきかどうかを迷っているような感じで彼は話した。

「送られてきたビデオテープは、まったく参考にならない。なぜならば、すべてのファイ
トがフェイクだからだ」

その時、小動物が発するような「ふーむ」という声が聞こえた。

次男のクロンが私たちのいるリビングルームにやって来ていてソファで眠り、寝返りを
うっていた。

私が何も話さないでいると、ヒクソンは言った。

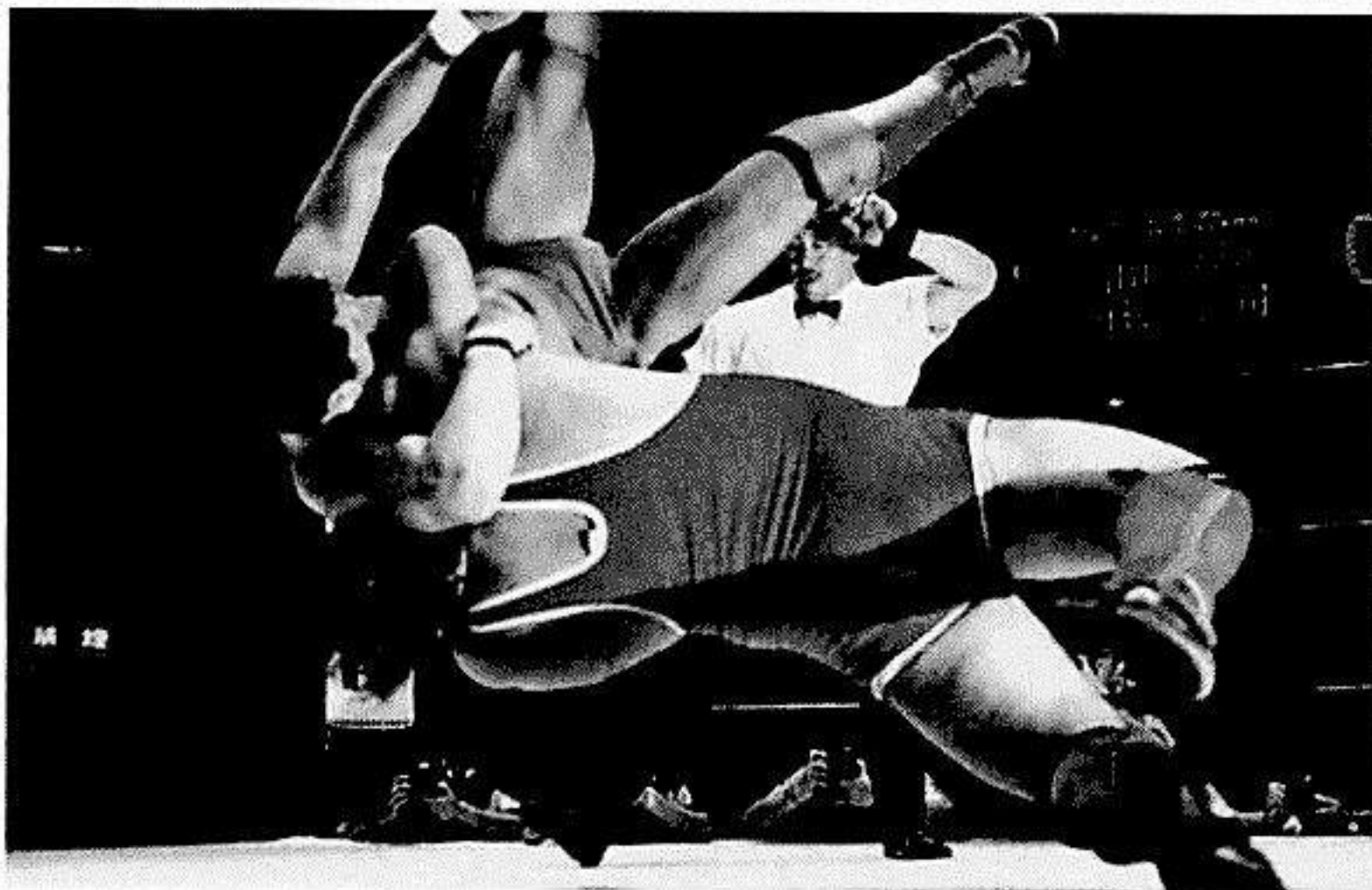
「まあいいさ。私は誰が相手であろうと、プロのファイターとして最高のコンディション
をつくって相手を全力で倒す。それだけだ」

有難う。今日は良い話が聞けた。10月11日を楽しみにしている。

そう言って私とカメラマン、映像スタッフが一齐に立ち上がると、クロンが目を覚まし
た。そしてヒクソンに近づいていく。ヒクソンはクロンを軽々と抱き上げて彼の頬にキス
をした。

第2章

「プロレス体験者」



「期待」と「惜別」

ヒクソン×高田戦は誰のための闘いだっただのか？

従来の格闘技イベントの主催者は、私財を投じて道楽、あるいは慈善事業を行っているわけではない。稀まれにそのような大会もあるが、日本でのビッグイベントでは有り得ない。イベント主催者は、まずは選手を確保し、そのうえでファンが望むカードを組む。と同時にスポンサーを募り、プロモーションも展開し収益をあげることが目的としている。選手たちもファイトマネーを得てリングに上がって闘う。それをファンが観て楽しむ。応援している選手が勝てば嬉しいし、もし敗れたとしても好勝負が展開された末のものであったなら、相手選手に惜しめない拍手を贈ることだろう。闘いから勇気を得ることもある。『PRIDE.1』が開催される4年半前にスタートし人気を博していた立ち技格闘技K-1も基本的に、そのシステムでまわっていたし、会場にはスポーツライクな雰囲気があった。

でも、『PRIDE.1』に醸される空気は、そうではなかった。

幾つかの企業の集合体であったKRSももちろん慈善事業として『PRIDE.1』を開催したわけではない。そこで収益をあげる、或るいは、PRIDEシリーズを継続的に

開催することで収益をあげることがを基本的には目的としていたはずだ。でも、あの1997年10月11日に至る過程においては、スタッフの間には、「まずは、『PRIDE.1』を實現させなければならぬ」との強い意志が共有されていたように思う。極端にいえば、採算を度外視してでも絶対に實現させる、との熱い決意だ。

それは何のために？

「高田延彦を男にするために」である。

KRSは何としてもヒクソン×高田戦を實現したかった。それは高田にファイターとしての最高の舞台を用意してあげたかったからである。

後々、ヒクソンのファイトマネーが高額であることが大きな話題になる。1億円前後だといわれた。そのことが彼を絡ませた好カードの實現の障害ともなる。

では、どの段階でヒクソンのファイトマネーは高騰したのか？ それは『PRIDE.1』での高田戦である。修斗が主催する『バーリ・トゥード・ジャパンオープン』にヒクソンは、94年、95年と2年連続して参戦しトーナメント連覇を果たしているが、その時のファイトマネーは、それほど高額なものではなかった。にもかかわらず、KRSはヒクソン側の求めに応じ高額なファイトマネーの支払いを約束したのだ。それは、ヒクソン×高田戦を實現させるため、高田に最高の舞台を用意するためだった。KRSからは、従来の格闘技イベント主催者とは異なる「利益よりも大切なことがある」というこだわりが感じ

られた。

観る側にとっても『PRIDE.1』には特別な意味があった。

チケットを買い、当日、東京ドームに足を運んだのは、ほとんどがプロレスファンだった。そして彼らは、普段のプロレス観戦とは異なる想いを抱いて東京ドームのゲートを潜り、席に座ってリングを注視した。それは独特な緊張感を伴うものだった。

今日で終わりなのか、そうではないのか。

「この闘いを見終わったら、20世紀も、もう終わっていい」

これは『PRIDE.1』のポスター等に記されたフレーズだが、決して大袈裟なものではなかった。

プロレスラーは本当に強いのか、プロレス界を代表する男の一人である高田延彦は、そのことを私たちの目の前で証明してくれるのか。

テーマはそこにある。それでもファンの想いは、「期待」と「惜別」に二分されていた。

「絶対に高田は勝つ。誰が何と言おうと、この東京ドームの大観衆の前でヒクソンを倒し、勝利の雄叫びを上げ、俺たちの溜飲を下げてくれる」

そんな「期待」――。

一方で「惜別」を覚悟するファンもいた。

「信じてきたプロレスはリアルファイトではなかった。苛烈な環境で若き頃から闘い続けてきたヒクソンに、おそらくプロレスラーの高田は勝てないだろう。それでも、この闘いから目を逸そらすわけにはいかない。最後を見届けよう。そしてプロレスに別れを告げよう」

でも、そんな彼らにしても、心のどこかで高田に、一縷いちるの望みを託してはいた。観続けてきた大好きなプロレスをできることなら信じたい、との想い――。

試合当日、私はオープニングセレモニー開始の3時間前に東京ドームに入った。まず、この日の試合を生中継する『パーフェクトTV!』の関係者と打ち合わせをし、その後、雑誌の編集スタッフとミーティング。それを終えて、関係者と雑談を交わした後、フィールドに出てリングサイドに向かおうとしていた。

その時、背後から誰かが怒気を込めた声で私の名前を叫んだ。

「コンドー！」

立ち止まって振り向くと、その声の主であろう男が続けざまに叫ぶ。

「高田は負けねえからな。いい加減なことばっかり言ってんじゃねえぞ。プロレスは強いんだ！」

視力があまり良くない私は、叫んでいる主が誰なのか特定できない。その時、私は眼鏡をかけていなかった。

でも、私が、そう怒声を浴びせられた理由は、すぐに思い当たった。

この試合の数日前に私は、CSチャンネル『FIGHTING TV サムライ』の「サムライニュース」という生番組に出演した。大先輩であるプロレス評論家の菊池孝さん、当時『週刊プロレス』（ベースボール・マガジン社）の編集長だった濱部良典さんも一緒だった。3人のデイベート形式でヒクソン×高田戦の勝敗、そして、どのような展開になるかを予想するという企画で、まずは私たち3人に厚紙のボードとペンが渡された。そのボードに、どちらが勝つかの予想を書くのである。

「ヒクソンのTKO勝ち」

私は迷うことなく、ボードにペンを走らせた。

総合格闘家としての実力を比較すれば、どう考えてもヒクソンが上である。どのような展開になれば高田が勝者となるのか……さまざまパターンを考えてみても、それを具体的なイメージとして頭に浮かべることができなかつた。それに、この日までに、幾つかの雑誌やラジオ番組、あるいは大会パンフレットに、ヒクソン×高田戦の予想を話したり、書いたりしており、ことさら改めて考えることもなかつた。

90年代後半は、「プロレス側の人間」^{サイド}「格闘技側の人間」^{サイド}という言葉が、よくメディアにも用いられた。つまり、プロレスラーがアルティメット（総合格闘技のことを当時は、よく、そう呼んでいた）^{サイド}ルールの闘いに出場する場合、どちら側から記事を書くか、発言をする

かで、そう分けられていたのだと思う。それに当てはめるなら、元『ゴング格闘技』（日本スポーツ出版社）の編集長であった私が「格闘技側の人間」^{サイド}で、菊池さんと濱部さんが「プロレス側の人間」ということになる。だから予測できたことだったが、菊池さんと濱部さんは、「高田の勝ち」と書いたボードを翳^{かざ}していた。

彼らの展開予想としては、ヒクソンが寝業に持ち込む前に、高田がハイキックなどの打撃を繰り出しKOで勝つというものだった。それに、日本で闘うという地の利もある。加えて、これまでにヒクソンが闘ってきた対戦相手を考えれば、いまの彼に対する評価は過大である、とのことだった。

私も見解を話した。

その時は、高田がこれまでに一体、どれだけのリアルファイトを経験してきたのか……という点には触れなかった。ただ、総合格闘家として考えた時のキャリア、そしてレベルの違いについて話した。その後、司会者から、こう問われた。

「TKO……KOじゃなくてTKOと書かれていますか、具体的には、どのような形で決着になると予想されていますか？」

私は答えた。

「おそらくは早い段階でヒクソンがグラウンドの展開に持ち込むと思います。早ければ1ラウンド。もしかして、1ラウンド、2ラウンドが互いに距離を取り合って見合う展開に

なったとしても、3ラウンドまでにはヒクソンはグラウンドに高田を引きずり込みます。ルール上、ロープブレイクは認められていませんし、寝業の時間制限もありません。ならば、ヒクソンはグレイシー柔術のテクニクを駆使してチョークスリーパーか、もしくは腕挫ぎ十字固めを決めるのではと予想しています。

でも高田にもファンの期待とプライドがあります。だから絶対にギブアップはしない。そのため『これ以上は無理だ、危険だ』とレフェリーが判断し試合をストップする。よってTKO決着になると思うんですよ」

勝敗予想は真逆だったが、「高田は絶対にギブアップしない」という部分では菊池さんも同じ意見だった。

おそらく私に対して怒気を込めた声を浴びせた男は、この番組を観ていたのだ。いや、もしかすると別のメディアでの私の発言を観たり読んだりしていたのかもしれない。そして彼は、プロレスが大好きで、プロレスを守りたいとの想いを強く抱いていたのである。

金曜8時の『ワールドプロレスリング』

さて、あなたは、「プロレス体験者」だろうか？

私は、「プロレス体験者」である。

「プロレス体験者」とは実際にプロレスラーになりリングに上がって闘うことをいうのではない。

子どもの頃にプロレスに出会い魅^みせられ、叶うことならプロレスラーになりたいと思い、プロレスラーこそが最強だと信じ、また、それはリアルファイト（真剣勝負）であり、それに対してアンチテーゼを唱える者からプロレスを守りたい……そう考えたことがある者が、「プロレス体験者」である。そして、おそらくは、この「プロレス体験者」は昭和生まれの者に限られる。なぜならば、平成時代に生まれた者が、物心がつきプロレスを観る頃には、「プロレスは真剣勝負かショーなのか」といった論争には終止符が打たれていたからである。

私がプロレスをテレビで観て魅せられたのは小学校低学年の時だった。当時、名古屋テレビ（テレビ朝日系列）で金曜夜8時に放送されていた『ワールドプロレスリング』である。

『ワールドプロレスリング』以外にも、中京テレビ（日本テレビ系列）で『全日本プロレス中継』、三重テレビで『国際プロレスアワー』（東京12チャンネルで制作）も放送されていたが、それらを観たのは、アントニオ猪木に魅せられた後である。

私が初めて観たプロレスは、76年2月6日、日本武道館で行われた『格闘技世界一決定戦』アントニオ猪木×ウイリエム・ルスカ戦ではなかったかと思う。この試合には前章で

も触れた。それが生中継であったのか録画中継であったのかは解らない。なぜ、その試合を観たのかも思い出せない。ただこの試合を観た時にリングで躍動する猪木に魅せられ、それまでに経験したことの中になかった熱さをカラダ中に感じたことは、いまでもハッキリと憶えている。

猪木に出会って以降、当時小学校低学年だった私の生活の中心は、プロレスになった。それは、一日中、プロレスのことを考えるようになったということである。

それから毎週、金曜夜8時には、14インチのブラウン管のテレビの前に正座をするようになった。猪木が、ジョニー・パワーズ、タイガー・ジェット・シン、スタン・ハンセンといった、いかにも狂暴で強そうな外国人レスラーを相手にタッグマッチ、シングルマッチで激闘を繰り広げる。実況担当アナウンサーが舟橋慶一から古舘伊知郎に代わっていく中で私のプロレスに対する熱は、さらに高まっていく。

私が小学校、中学校に通っていたのは、「ゆとり教育」が始まるずっと前のことで当然、土曜日も毎週登校していた。

すると土曜日は朝から、仲間同士での話題はプロレス一色になる。

「昨日の予告観たか？」

そう興奮気味にクラスの仲間が話しかけてくる。私の答えを待たずに仲間は話し続ける。「MSG（マディソン・スクエア・ガーデン）タッグリーグ戦というのが開かれるらしいぞ。」

これは（全日本プロレスの）最強タッグより凄いんじゃないか。猪木がボブ・バックランド（ニューヨークの帝王）と呼ばれた当時のWWF世界ヘビー級チャンピオン）と組むらしいぞ。アンドレ（ザ・ジャイアント）も来るし、それにハンセンは、（ハルク・ホーガンとタッグを組む。豪華だよなあ、猪木組は優勝できるのか？」

あの頃、私たちは、何時間でも飽きることなくプロレスを話題にして話し続けることができた。猪木の強さについて、猪木の勇気について、プロレスの凄さについて、またマニアックな情報に至るまで。プロレスは、それほどまでに私たちを虜にする存在とりこだったのである。

とはいえ、クラスの全員が毎週金曜夜8時に『ワールドプロレスリング』を観ていたわけではなかった。

強力な裏番組もあった。

『太陽にほえろ！』（日本テレビ系列）や、中学生に人気絶大だった『3年B組金八先生』（TBS系列）も金曜8時に放送されていたのである。

私は、それらの裏番組を一度も観たことがなかった。田原俊彦、近藤真彦、野村義男……「たのきんトリオ」と称されていた3人が出演する『3年B組金八先生』の話をクリックの仲の良かった女の子が私にしてくる。

「そんなもん観てんじゃないやねえよ。お前もプロレスを観ろよ」

何の疑いも持たず無神経に、そう口にしていたことを思い出す。

プロレスを観ることが最高の楽しみだった。プロレスこそが生活の中心だったのである。だが、私が熱中しているプロレスに対して、否定的な意見を浴びせてくる者もいた。ストリートに言えば、プロレスを馬鹿にする者が少なくなかったのだ。

「プロレスなんて八百長じゃねえか。それを観て熱くなってるなんて馬鹿じゃねえの」
「プロレスはボクシングとは違って、スポーツじゃなくてショーなんだよ。どちらが勝つかは決まっっていて、それを演じているって俺の親父が言ってたよ」

「だっておかしいだろう。なんでロープに振られた奴が、わざわざ返ってきて相手の技を受けるんだよ。返ってこなきやいいじゃん」

「あの馬場のスローモーな動きを見たかよ。16文キックって馬場が蹴ってるんじゃないかよ。あんな触れただけで倒れて何で3カウントを奪われるんだよ。やらせに決まってるよ」

「大体なあ、プロレスなんて観ている奴は頭が悪いんだよ。騙されやすいというか……」
そんな風に言われると、とてつもなく腹が立った。だから言い返す。

「大体、お前らちゃんとプロレスを観たことがあるのか。八百長だって親父が言っていたって？ 自分の目でちゃんと確認しろよ。本当は、金八とかを観ててプロレスを直視したことなんかないんだろう」

「それにな、お前らリングのロープを触ったことがあるのか。あれは、とてつもなく硬くて弾力性があるんだ。ロープに振られて、それを掴むことができなかつたらカラダは嫌でもリバウンドするんだよ。ロープに触ったこともない、振られたこともないくせに知ったようなことを言うな！」

「16文って何センチか知っているか？ 知らないだろう。40センチだぞ。そんな大きな足にどれだけの破壊力が秘められているか解るか。動きが速いか遅いかは問題じゃない。そもそも16文の巨大さも解ってない奴がプロレスに文句を言うな！」

いま振り返れば、中学時代に私が言っていたことは無茶苦茶である。「ロープに触ったことがあるのか？」と問い質し^{ただ}ながら、私自身もそんな経験はない。16文の足裏に触れる衝撃など知る由もないのだ。ただ単に自分が大好きなプロレスを守りたかつただけなのだ。そこに冷静になってプロレスを検証しようという考えなど、まったくなかつた。プロレスを馬鹿にすることで、プロレスに熱中する者をあざ笑う者を許せないという思いが先走つただけだったのかもしれない。

苦しみの中から立ちあがれ

「プロレス^{サイド}側の人間」「格闘技^{サイド}側の人間」と前に書いたが、学生当時、私は明らかに「プ

ロレス側サイドの人間」だった。けれども、対極にあったのは「格闘技側サイドの人間」ではなく「世間の認識」だった。プロレスを擁護することで世間と闘っていたのだ。

そんな頃、衝撃的な書籍が2冊刊行される。いずれも著者はアントニオ猪木である。

『苦しみの中から立ちあがれ』（みき書房）

『勇気く炎のメッセーじ』（スポーツライフ社）

中学生時代、田舎で暮らしていたから歩いて行ける距離に書店は一軒もなかった。それでも、休みの日に電車に乗って書店へ行き、わずかな小遣いをはたいて、その本を手に入れた、貪るように読んだ。

それは刺激的な体験だった。

特に私を熱くさせたのは、『苦しみの中から立ちあがれ』だった。

「俺のような過激な生き方をしてみろ」

表紙にサブタイトルの刻まれた言葉通り、全編にわたって猪木が刺激的な言葉で読者に語りかける。

「限界などない、あるのは限界を口ぐせにしている自分だけだ」

「燃えて燃えてカスすら残らないような生き方をしてみよ」

「しくじることを恐がって何かができるわけがない 真剣に生きている奴を嘲うな！」

「才能などというちっぽけなものにしがみつくな」

「敵が多くなる過激な生き方をとことんやってみよ『ざまあみやがれ』が俺を甦らせた」
「逃げない人生だから自分がある 一時の恥をのがれるために一生の恥を背負いこむな」
「安定だけの人生に冒険などあるものか でかいものに挑戦する時の昂揚感を知れ!!」
「人に信じてもらおうなんて思うな 人目や世間体を気にするから何もできなくなるのだ」……。

挙げればきりが無いのだが、熱いタイトルが並び、そこに猪木の実体験に基づいた熱いメッセージが綴られている。

この書が書かれたのは猪木が異種格闘技戦シリーズに一区切りをつけ、NWA、AWA、WWFなど世界中にあるすべての王座を統一して真のチャンピオンを決めるというIWGP構想をぶち上げていた頃である。そして私が読んだのは、中学校卒業を間近に控えた時だった。上京し全寮制の男子校に進学することが決まっていた私に多大な勇気を与えてくれた。

プロレスを八百長だと言う人たちに対しても猪木は『苦しみの中で立ちあがれ』の中で、こう反論する。

「私は、リングにあがって、自分を主張している。プロである以上、リングが私の言論

の場だ。主張の場だ。

リングで暴れ、相手を攻めたり、攻められたりしながら、肉体の極限にチャレンジしている。

なのに、プロレスはやれ八百長だ、やれショーだ、打ち合わせがあるといわれる。そんなものはいっさいない。

自分を主張する場があるプロレスをそのようにボロクソにいわれることにがまんができなかった。

TV、雑誌などのインタビューに出ると決まって訊かれるのが、

「プロレスはショーか？」

という「項目」である。何て貧しい感性しか持ち合わせていない人たちなんだ。そのたびに、なさけなくなる。

うわべでしか、ものごとを判断できない人たちである。結果を知り、それで全てを理解できたと思ひ込む傲慢な人たちである。世の中には黒か白のどちらかしかないと決めつける貧弱なオツムの人たちである。

肉体をぎりぎりまで使い、その上で勝ち負けを決めるのがプロレスである。プロとは極限に挑む職業である。極限まで己れの体を使いきる時に、八百長ができるわけがない。ショーとして見せる余裕があるわけがない。

プロである以上、勝ち負けがあり、勝たねばならない。また、プロだからこそ、ただ勝つだけではファンに納得してもらえない。華麗に勝たねばならない。

この華麗さ故に、ショーといわれるのならプロスポーツは、全てショーである。アリのボクシングひとつとりあげても明白だ。〳

いま読み返せば、その主張が矛盾に満ちていることに気づくのだが、「プロレス側の人間」だった当時の私は、心の中で「そうだ！」と叫んでいた。

高校に入学してからの3年間、私は将来、プロレスラーになりたいとの思いもあり、格闘技に触れようと柔道部に所属し、練習は真面目にやっていたが、勉強はほとんどしていなかった。でも3年生の夏休みが終われば大学受験のことも考えねばならない。それまで一度も受けたことのなかった模擬試験を、3年生の12月に初めて受ける。その結果が大学入試の1週間前に返ってきた。

予想外の結果だった。

志望校に対する合否判定はすべて「E」。

AからEまでの5段階に分けられていて、その最低ランクだ。隣のコメント欄には「志望校検討の余地あり」と記されていた。

愕然としたが、勉強など3年間、ほとんどやっっていなかったのだから当然のことだ。そ

の時、無意識のうちにレポート用紙の裏側にペンで、こう書きつけていた。

「限界などない、あるのは限界を口ぐせにしている自分だけだ」

感銘を受けた書『苦しみの中から立ちあがれ』の中にあつたフレーズである。

その紙を机の前に貼り、そして誓つた。

「猪木はプロレスが真剣勝負であることを証明するために世間と闘っているんだ。俺も受験ごときに負けるわけにはいかない」と。

それから1週間、私は一日2〜3時間しか眠ることなく英語の勉強をした。その間に『試験にでる英単語』『試験にでる英熟語』（いずれも森一郎著、青春出版社）を類義語も含めて、すべて暗記した。私が人生を通して、もつとも真面目に勉強に取り組んだ時間である。そのためか30年以上も経過したいまでも、『試験にでる英単語』『試験にでる英熟語』の最初のフレーズは、すぐに思い出せる。「Intellect（知性、知力）」と「up to（〜の義務で、〜に至るまで）」。

受験を終えて寮に戻り、48時間の眠りについた後、志望大学の合格を確認した。

小学生の時から高校を卒業するまで、日々の中心はプロレスだった。気がつくくとプロレスのことばかりを考えている毎日だった。

だが、プロレスがリアルファイトであるかどうかを、まったく疑っていなかつたわけでは

はない。

そもそも、プロレスはシリーズが始まれば毎日のように試合が行われる。そんな状況下でリアルファイトをやり続けることができるものなのか。ボクサーが試合を行うのは数カ月に一度だ。それが毎日とは、どういうことなのか。

また、自分自身の柔道体験から、不信に思う場面もいくつかあった。たとえば、グラウンドでの攻防で一方の選手が相手の腕を抱えて腕挫ぎ十字固めを決めにかかるシーンがある。その時に腕が決められそうになったり防いだりすることが繰り返されるのだ。腕が行ったり来たりする。でも柔道をやっている、そんなことは有り得なかった。

それに猪木は、「相手に9の力を発揮させて10の力で仕留める。それがプロレスだ」と言う。でも、リアルファイトで、そんなことが可能なのかどうかと考えた。柔道では、勝つために相手の長所を殺すのは鉄則だ。相手の力を最大限に引き出すなどという余裕が真剣勝負の場においてあるとは到底思えなかった。

それでもプロレスを信じたい気持ちは強かった。プロの世界では、私などが想像もできないことがあるのだと自分に言い聞かせていた。

大学に入学するとすぐに私は、スポーツ新聞、プロレス週刊誌の編集部を訪ねて回った。アルバイトスタッフとして採用してもらえないかと頼み込みに行ったのだ。ほとんどは門前払いよろしく断られたのだが、唯一『週刊ゴング』だけが私を受け入れてくれた。

そこから私は、本当の意味でプロレスを知ることになる。

私にプロレスとは何かを教えてくれたのは、現場での取材とスポーツ紙の記者やフリーで活躍していた社外の人たちだった。『週刊ゴング』の編集部内では、プロレスがリアルファイトか否かなどという話は一切出なかった。むしろ、そのことに触れづらい雰囲気があったのだ。

1年、2年と会場で取材を続け、流れを見ていく中でプロレスがリアルファイトでないことに確信を持つようになった。稀まれにあらかじめ勝敗を決めることなく行われる「シニョー」と呼ばれる試合も存在したし、時に決められていたストーリーが両者の感情のもつれなどから狂うこともある。でも、それは本当に稀で、ほとんどは、あらかじめ勝敗を決めたうえでプロレスは行われていた。だが、それは私を幻滅させることではなかった。そこにはプロレスならではの奥深さもあり、それは別の意味で興味深いものであったし、そして何よりもUWFの存在が希望を持たせてくれたのである。

UWFへの熱き期待

UWFは、ユニバーサル・レスリング・フェデレーションの略称。旗揚げ戦は、84年4月11日、埼玉・大宮スケートセンター。メインイベントはエースの前田日明VSダッチ・マ

ンテルのシングルマッチだった。

旗揚げ当時UWFは、まだ格闘技色の強い団体ではなかった。日本人選手としては、ラッシュャー木村、剛竜馬、グラン浜田、マツハ隼人らが参加する新団体に過ぎず、また不可思議な船出をしたことの方が話題になっていた。猪木のマネジャー的役割を担っていた新間寿が代表を務める団体で、試合をフジテレビが放映するとも言われていた。後に猪木が新日本プロレスを離れてUWFに合流すると噂されてもいたのだ。だが結局のところ、UWFがフジテレビで放映されることはなかったし、猪木がUWFのリングに上がることもなかった。

UWFが格闘技色を前面に押し出すようになったのは、同年7月23、24日に後楽園ホールで開催された『UWF無限大記念日』に、かつてタイガーマスクとして新日本プロレスのリングで活躍した佐山聡が復活参加して以降だろう。後にスーパー・タイガーを名乗るようになるが、この時の佐山のリングネームは、ザ・タイガーだった。

オープニングシリーズの途中から参加していた藤原喜明と高田延彦、そこに佐山とともにタイガージムでインストラクターを務めていた山崎一夫がUWFに加わる。その後、カール・ゴッチの息子そらなかまさみと呼ばれていた木戸修、ゴッチの娘婿であった空中正三も参加を表明した。ラッシュャー木村、剛竜馬、グラン浜田の3人は、5月に開かれたシリーズを最後にUWFを去っており、大きく陣容が入れ替わっていく。これで前田、藤原をはじめ、カ

ール・ゴツチを尊敬する男たちが集った形となる。そこからUWFは、ゴツチ流ストロングスタイルを実践していくことになったのだ。

フアイトスタイルは従来のプロレスとは大きく異なっていた。

まずロープワークが廃され、相手の技を簡単に受けるシーンが消える。主流となったのはキックを主体とする打撃技とグラウンドでのサブミッションの攻防。チキンウイング・アームロック、チキンウイング・フェイスロック、V1アームロック、V2アームロック、クロック・ヘッドシザース、ワキ固めという、それまでのプロレスのリングではほとんど見かけることのなかったフィニッシュホールドとなる関節技も登場する。そこにキックを主流とした打撃とスピードも加わった闘い模様は、観る者の目にシリアスに映った。

「いままでのプロレスはショー的な要素が多く、純粹な格闘技とは見られてこなかったが、UWFだけは本物だ」

そう叫ぶファンが増え、後楽園ホールは常に満員となった。

キックと関節技の応酬となるスーパー・タイガーVS藤原喜明、互いに迫力満点の打撃を繰り出す前田日明VSスーパー・タイガーは特に注目度が高く、それらの試合が多く行われた後楽園ホールは、いつしか「UWFの聖地」と呼ばれるようになる。

だが、UWFの闘いがリアルファイトであったかといえ、そうではなかった。根底にあるものはプロレスと同じで、あらかじめ勝敗を決めてのものだったのである。単に闘い

模様を、よりシリアスに見えるものに変えたに過ぎなかった。

私が『週刊ゴング』の編集部に入ってからすぐに、UWFは解散する。後楽園ホールは熱気に溢れていたとはいえ、地方の興行での客入りは決して良くなり、また、前田と佐山の関係が悪化したことも解散の原因の一つだっただろう。ここまでが「第1次UWF」または「旧UWF」と呼ばれている。

その後、前田、藤原、木戸、高田、山崎の5人は「UWF軍」として新日本プロレスのリングに戻る。当時若手選手だった中野龍雄（現・巽耀^{たつあき}）、宮戸成夫^{みやととしげお}（現・優光^{ゆうこう}）、安生洋二の3人も行動をともにした。新日本プロレスとUWFが業務提携をした形だ。

UWF軍は、85年12月6日、両国国技館大会で新日本プロレスのリングに上がり、88年3月に、そこを去る。

この間に伝説となっている喧嘩マッチ、アンドレ・ザ・ジャイアント×前田日明戦（86年4月29日、三重・津市体育館）が行われ、また、UWF軍が新日本のリングを去るきっかけとなった前田の長州顔面蹴撃事件（87年11月19日、後楽園ホール）が起こった。アンドレ×前田戦は録画ながらテレビ放映される予定だったが、それは中止され、また、前田ー長州間の顔面蹴撃は6人タッグマッチ（前田日明&木戸修&高田延彦VS長州力&マサ斎藤&ヒロ斎藤）の最中に生じたのだが、当然混乱を招く。この時は高田が要所で機転を利かしてサッとリングに飛び出しフォールされることで試合を成立させている。

そして、いよいよ新生UWFの誕生となる。

前田、高田、山崎らUWF戦士は、旧UWF時代とは比べものにならないほどに知名度を上げていた。この頃はまだ『ワールドプロレスリング』が金曜夜8時にテレビ朝日系列で全国放送されていたから、新日本のリングにおけるUWFのラジカルなファイトは多くのファンの支持を集めていたのだ。

新生UWFの旗揚げ戦は、88年5月12日に後楽園ホールで行われたが、チケットが前売り発売初日に完売するなど異常な盛り上がりを見せた。闘いのスタイルも、キックなどの打撃とサブミッションが中心、相手の技を容易に受けることを廃したもので、この部分は旧UWFを踏襲していた。加えて興行スタイルにおいても従来のプロレスとは一線を画す。シリーズ巡業形式ではなく、試合は月に1回。

そうすることにより、妥協のない闘いをリングで繰り広げていることを強調した。

この頃になると私は、『週刊ゴング』から『ゴング格闘技』へと編集部を移っていた。

『ゴング格闘技』は86年10月に創刊されるのだが、その準備段階から加わった。格闘技全般を扱う雑誌ではあったが、メインは、やはりUWFで創刊号の表紙は前田日明だった。

また、88年5月から『週刊ゴング』のシリーズ増刊として『格闘技UWF』もスタートするのだが、その編集も兼務した。

私は新生UWFに大きな期待を寄せていた。新生UWFもリング上でリアルファイトを

繰り広げていたわけではない。それでも、UWFにはプロレスをリアルファイト化させる可能性が秘められていると感じていたからだ。当時、UWFの道場は東京・世田谷区の大蔵にあった。小田急線の成城学園前駅からタクシーでワンメーター、もしくはツーメーターの距離だったが、88、89年頃、ほぼ毎日のように、そこに通い取材をしていた。

UWFのリアルファイト化については、『ゴング格闘技』で毎月のように煽った。実際に道場で行われている練習を見ていると、リアルファイト化は、それほど難しいことではなく、すぐに実現できることのように私には思えたのだ。これにスポーツジャーナリストの二宮清純さんも同調してくれて、毎月のようにUWFに関する記事を『ゴング格闘技』に寄せてくれた。幾度となく酒を飲みながら話したが、二宮さんも私と同じ想いを抱いていた。

当時の、創刊から数年間の『ゴング格闘技』が、キックボクシングや極真カラテと並べてリアルファイトではないUWFを扱っていたことに対して、揶揄されることもある。でも、あの頃の私たちは、UWFがリアルファイトではないことを知らずに報じていたわけでも、知っていて確信犯的に扱っていたわけでもない。「UWFのリアルファイト化」をファンの熱そのままに、どうすれば実現できるかと真剣に考えて同誌を編んでいたのだ。

だが結局のところ、UWFのリアルファイト化は実現されなかった。90年12月1日、長

野・松本運動公園体育館での大会を最後に、新生UWFも解散してしまふ。

私は虚脱感に見舞われた。

そして一度、プロレス界、格闘技界から離れる決意をする。まだ20代前半だったが、『ゴング格闘技』の編集長を辞め、米国へと旅立ったのだ。もし、その後の93年秋に『UFC（アルティメット・ファイティング・チャンピオンシップ）』が開催されることがなかったら、 그레이シー一族の存在を知らずにいたなら、私が再び格闘技界に取材者として戻ってくることはなかっただろう。

『流血の魔術 最強の演技 すべてのプロレスはショーである』という書を、元新日本プロレスレフェリーのミスター高橋が著し世に出したのは、2001年12月のこと。『PRIDE.1』でヒクソン×高田戦が行われた約4年後ということになる。

この時期になると大方のファンが、プロレスはリアルファイトではないとの認識を持っていたとはいえ、リングの真っ只中に長年いた名レフェリーが、「プロレスはショーである」と告発したのである。この衝撃は大きかった。

この書が世に出たこと自体は、私は良かったと思っている。モヤモヤ感は消したい。それをスッキリさせてくれた。でも心のどこかに妙な引っ掛かりをおぼえる。「プロレスは八百長だ」というステレオタイプの声に対しては、どうしても同調できない部分があった

のである。

その直後に私は当時、編集長を務めていた『K-Files (K-ファイル)』特別編集号(アスキー)の中で座談会を企画した。ミスター高橋が著した暴露本に対して、プロレスを長年見続けてきた者の想いをぶつけ合いたいと思ったからだ。漫画家の板垣恵介氏、猿渡哲也氏、評論家の鈴木邦男氏、元『週刊プロレス』編集長のターザン山本氏、元UWF戦士の宮戸優光氏、そして私の6人で4時間近く語り合った。

その中で私の心に響いたのは宮戸氏の、こんな言葉だった。

「この本は高橋さんの主観で書かれたものです。でも、それがプロレスの100パーセントだと思われることが私は嫌なんです。だって違うんですよ。そうじゃないんですよ」この座談会で私と彼の意見は対立していたのだが、そう言いたい気持ちがよく理解できた。

彼は、こうも言った。

「自分はUWFの道場でシュート以外の練習をやったことがないんですよ」

その通りである。私も『週刊ゴング』の記者時代、新日本プロレス、UWFの道場での練習風景を数限りなく見てきた。「決めっこ」と呼ばれるグラウンドレスリングを中心に彼らは強くなるためにハードなトレーニングを日々、続けていたのだ。強くなければ生き残れない。それがプロレス界の掟でもあった。

それだけではない。UWF軍が参戦していた当時、新日本プロレスの会場に取材へ行く
と、そこには独特な緊張感が漂っていた。試合開始は18時。その3時間前に会場に着くと
UWF軍がリングを使って練習をしている。「バコーン！ バコーン！」というキックミ
ットを蹴る音が、開場前の館内に響きわたる。その後、新日本プロレスの選手たちが練習
を始める。互いに交わることはない。プロレスの枠の中であつたにしても、「いつでもや
つてやるぞ」という緊張感が、そこには確実に存在していた。

だが訝いぶかしいのは、それがリング上の闘いに直接的に反映されていなかつたことである。
UFCをはじめとする総合格闘技の舞台で繰り広げられているのはリアルファイトだ。プ
ロレスはそうではない。

私はヒクソン×高田戦の前に、こう言い続けていた。

「長年、リアルファイトを闘い抜いてきたヒクソンと、そうではない高田にはファイター
としての大きな実力差が生じている」と。

それでもプロレスを真剣に見たこともない人が、「プロレスなんて八百長なんでしょ。
だから弱いんだ」などと軽口を叩くと、とてつもなく腹が立つ。プロレスラーがプロレス
ラーであるための努力を知らない奴に、そんな風に言ってもらいたくないと強く思うのだ。
そして、「プロレスを馬鹿にするなよ！」と怒気を込めて言いたくなってしまう。

矛盾していることは解っている。

私はプロレスが好きだった。そしてプロレスがリアルファイトか否かを知りたかった。その答えを知ったうえで嘘をついてまでプロレスを守りたいとは思わない。それでも、プロレスラーの中には強くなるために道場で血が滲むような努力を続けていた者も多くいる。この事実だけは、きちんと伝えたいのだ。プロレスはリアルファイトではなかったが、単なるフェイクではなく、もっと奥深いものなのである。

これは、長年プロレスを観続けてきた者にとって共有できる想いではなかったか。私は、『週刊ゴング』の編集部に入、18歳で入り、直じかにプロレスと接する機会を得た。それにより、さまざまなることを知り考えるところはある。とはいえ、想いは同世代のプロレスを観続けてきた者と同じだっただろう。

「期待」と「惜別」。

これも、実は根っこでは同じなのだ。

ヒクソン×高田戦は誰のための闘いだったのか？

「プロレス体験者」のための闘いだったのである。

第3章

1988

リオ・デ・ジヤネイロ



格闘技はスポーツではない

「センス自体が、生まれつきのものであるか、それとも後天的なものなのかを判断するのは難しいだろう。生まれ持つ才能というのは格闘家に限らず存在する。だが、その才能が発揮されるかどうか、そこにセンスがかかわってくるんじゃないかと私は考える。つまり、センスは育つ環境がつくり出すものでもあるんだ」

15年近く前のことだが、私はファイターにおける才能（センス）について長時間、ヒクソンと話した。その時、彼はさらにこう続けた。

「ファイターであるために、また真のファイターであり続けるために一番大切なことは、自分が何者であるかを常に考え続けることだ。自分自身を知ることからすべてが始まると私は信じている。」

自分は闘いたいのか否か、闘って何ができるのかできないのか、いま闘うべきなのかそうではないのかを考え、答えを導くというシンプルなことが非常に重要なんだ。人間が生きていく時間には限りがある。もしかすると数時間後に何かしらの理由で死を迎えることになるかもしれないのだから自分の意思を私は最大限に尊重している。もし、生活のためにと、やりたくもない仕事に就いたとする。仕事だから決まった時間には出社しなければ

いけないし、数時間を拘束されることになる。そんな自発性を無視した、義務感だけに縛られた状態で、闘いに挑むことはとてもできない。そこで良い結果が得られるはずもない。

だから、真のファイターでありたいなら、闘うことの意味を常に自分に問わなければならぬ。まあ、ファイターには誰だってなれるのさ。フィジカルを鍛えて、テクニックを身につけていけば、それはそれで、そこそこ闘えるだろう。でも、そこそこだ。ファイトを金儲けのためだけのものと考えるのであれば、それでもいいだろう。しかし、闘いを自らの尊厳を懸けて行うものだと思うのであれば、つまり真のファイターでありたいならば、それだけでは十分ではない。センスが必要であるとすれば、それはフィジカルやテクニックの面ではない。むしろスピリットにこそセンスは必要とされるだろう。これはアスリート全般ではなくファイターに限った話になるのかもしれないが……」

格闘技というのはスポーツにおいても特異なジャンルである。野球、サッカー、バスケットボール、あるいは陸上競技の選手などとは求められるセンスが同じではない。そのことを私が話すとヒクソンは言った。

「その通りだ。(アメリカン)フットボールでも、サッカー、バスケットボールであつても、時には暴力的なシーンが見られることがある。でも、それは格闘技が持つ性質とは根本的に異なる。」

私は、これまでに格闘技を純然たるスポーツであると考えたことは一度もないんだ。バ

スケッチボール、フットボール、ホッケーも、それらはすべて相手チームと競い勝つことを目的としているが、闘う相手を傷つけることを目的としてはいない。だが、格闘技は殺戮本能に根ざしている。それはすなわち、闘う自分が死に直面していると常に考える必要があるか無いかの違いだ。

スポーツは自分を他人と競わせるものだろう。逆に格闘技は、競い合っただけではない。競い合おうとすれば行くべき方向を間違えてしまう。他人と競うものではなく、常に自身を見つめるものなんだ。

いま自分がやっていることが正しいのか正しくないのか。いま自分は楽しいのか楽しくないのか、そんな人間が生きるうえでの根本的なことを常に考えることが大切なんだ。私は、そうしてきた。強靱な肉体とずば抜けた運動能力を身につけていたならば、その者は、おそらくは大抵のスポーツで成功を収めることができるだろう。でも、格闘技だけは、そうはいかない」

一つ注釈を入れる必要がある。

ヒクソンが言う格闘技とは、バリー・トウード（ルールを極限にまで廃した、ノールールに近い闘い）のことである。柔道、レスリング、ボクシングなどの一般的に格闘技と区分されるものを直接的に指すわけではない。

ウゴムのブーチファイト

昭和末期の1988年。ソウル五輪が開催されたこの年、日本はバブル期の真っ只中にあった。格闘技界では、第2次UWFがスタートし、大人気を博する。高田延彦は、前田日明に次ぐスター選手としてリング上で声援を浴びていた。

その頃、ヒクソンは日本から見て地球の裏側にあるブラジルのリオ・デ・ジャネイロでストリートファイトに明け暮れていた。

80年、米国、カナダ、西ドイツ、日本などがボイコットする中、モスクワ五輪が開かれた年にヒクソンは21歳でプロデビューを果たした。父エリオの反対を押し切って、かなりの体重差のある相手レイ・ズールとバーリ・トウードで闘う。ズールは、レスリング、ルタ・リーブリでキャリアを積んでおり、192センチ、100キロの体格を誇る選手だった。この一戦は激闘となるもヒクソンが勝利を収める。以降、ヒクソンは、ブラジル格闘技界において知らぬ者のいない大きな存在となった。そして4年後の84年、ロスアンジェルス五輪が開かれた年にズールと再戦し、ここでも勝利した。

そんなヒクソンに対して敵意を持つ者が少なくなかった。特にグレイシー柔術と敵対していたルタ・リーブリ勢は、ヒクソンをつけ狙っていたという。だから、街なかで喧嘩に

なることもよくあったが、ヒクソンはそれを受け続け、一度も負けることはなかった。

88年初頭に、柔術家のピン・ドゥーカンが、ルタ・リーブリの代表選手であるマルコ・ファスとバーリ・トウードで闘った。結果は引き分けとなるが、試合後にマルコは、こう言った。

「今日の試合も、時間制限が無ければ俺が勝っていただろう。俺だったらグレイシー一族のファイターが相手でも勝てる。ヒクソンとやったって俺が勝つ。でもヒクソンは俺を怖がっているから闘いたがらないだろう」

それを聞いてヒクソンは思った。

（闘ってやろうじゃないか）と。

この試合から4日後、ヒクソンは、父エリオ、弟ホイラーらとともにマルコ・ファスがトレーニングを積んでいたルタ・リーブリのアカデミーを訪れる。そこには、マルコ・ファスだけではなく彼を指導しているデニユーンソンもいた。

ヒクソンはマルコの前へ行行って言った。

「俺と闘いたいと言っているらしいじゃないか」

マルコは何も言葉を発さず小さく頷いた。

「よしわかった。ここでいい。いまから闘おう」

ヒクソンがそう言うのとデニユーンソンが間に入った。

「ちよつと待ってくれ。そんなに急がなくてもいいじゃないか」

その間、マルコは困ったような表情を浮かべてうつむいていたという。ヒクソンが振り返る。

「マルコは決して好戦的な態度をとらなかった。もしかすると、『ヒクソンが俺を怖がっている』というのは周囲に言わされていたのかもしれないと思ったよ」

結局のところ、その場ではエリオとデニューソンが話し合った。

「こうなった以上は闘うしかない」

そうエリオが言うと、デニューソンも「わかった」と答える。

「じゃあ、日時と場所を決めてくれ。俺たちは何時でも闘う。それに、マルコ・ファス以外にもグレイシーと闘いたいという者がいるのであれば、そのリストもつくっておいて欲しい。一族をあげてやる準備がある」

エリオがそう話して帰ろうとした。

その時だった。ヒクソンは背中越しに「俺がやってやるよ」という声を聞く。

エリオとデニューソンの会話を、アカデミーの隅で偉そうな態度で聞いていた背の高い男が声の主で、それがウゴ・デュアルチだった。後にUFCやPRIDEにも出場するほどの実力派ファイターとなる男である。

ヒクソンはきびすを返し、ウゴの前へ歩み寄る。そして言った。

「よし、いまからここでやろうじゃないか」

デニユーン、ホイラーが2人の間に割って入った。

「ここじゃない。スポンサーを募って大会を開いて皆の前でぶちのめしてやる」

ウゴは、ヒクソンに対してそう言った。

しかし、この時点でウゴは無名の選手だった。ヒクソンVSマルコならともかく、ヒクソンの相手がウゴではスポンサーを集めることも難しかっただろう。

ヒクソンは殴りかかって闘いを始めてしまおうかとも考えたが、それをエリオが止めた。デニユーンは言った。

「今日のところは帰ってくれ。日時と場所を決めてこちらから連絡するから」と。

ヒクソンたちは連絡を待った。

だが1週間を過ぎても、2週間を過ぎても、連絡は来なかった。

おそらくは、ルタ・リーブリ側が吹聴したのだろう。ウゴがヒクソンに喧嘩を売ったという話は広がっていた。

実は、この時、ヒクソンには時間が無かった。

2カ月後にはリオ・デ・ジャネイロを離れて兄のホリオンがいる米国カリフォルニア州トーランスへ行き、長期間滞在することが決まっていたのだ。ホリオンはグレイシー柔術を普及させるために米国に拠点を構えた。自らの家のガレージに道場を開いていた。そこ

でグレイシー柔術の強さを証明するために挑戦者を募っており、それを迎え討つのがヒクソンの役目だった。

周りの仲間たちはヒクソンに言った。

「ウゴは喧嘩を売って評判を取りたいだけだ。このままお前がアメリカに旅立ったら、ヒクソンは俺から逃げたと吹聴するつもりなんだ」

ヒクソンは早期にウゴと決着をつけなければならぬと思った。ホイラーを含めヒクソンの周辺の人間たちは皆でウゴの居場所を探した。

そして、ある土曜日の午後、仲間からヒクソンに連絡が入る。

「ウゴが、コパカバーナ近くのビーチにいる」と。

ヒクソンは10人ほどの仲間とともに、そのビーチに向かう。ヒクソンが向かっていることはウゴも察知していて仲間を集めて待ち構えていた。

ビーチには多くの人がいた。

だが、そんなことはお構いなしにヒクソンはウゴに言った。

「やっと見つけたよ。ここでやろうじゃないか。一対一の闘いだ。皆、手を出すなよ」

ウゴも左手で仲間たちに「手を出すな」と指示した。

誰が開始の合図を告げたわけでもない。ヒクソンとウゴは互いに前進し組み合い、ビーチの上に転がり込んだ。ビーチにいた人たちが、「何が始まったのか」と集まってくる。

だが闘いの決着がつくまでに大した時間はかからなかった。

砂の上を転がりながら上のポジションを奪ったヒクソンは、ひたすらウゴの顔面を殴り続ける。

「誰が最強だ、言ってみろ！」

そう叫びながらヒクソンは拳を叩き込んでいた。耐えられずにウゴは負けを認めた。

ヒクソンは闘いの最中は容赦しないが、闘い終えて負けを認めた相手に対しては寛大だ。声をかけてウゴを誘い2人で海に入って血を流した。

いろいろとあったがヒクソンはウゴと握手をしてもいいかと思った。だが、ウゴはそうではなかった。

「今日の闘いは納得がいかない。こんなビーチでなければ俺は負けなかった」

そう言うウゴに対してヒクソンは言った。

「じゃあここで、もう一度やるか」

ウゴは、「今日はやらない」と言い残して仲間たちと帰っていった。

その時は、俺はお前たちを殺す

それから1週間が経った。

ウゴとのファイトで傷めた拳が癒やされ、平静な日々を取り戻していた頃のことだった。ヒクソンは午前中の練習を終えて、仲間の家で昼寝をしていた。その時、誰かが自分の名を呼ぶ声が聞こえた。

「ヒクソン、ヒクソン」

目をこすりながら起き上がり窓を開けて下を見ると、バイクにまたが跨った仲間がいて叫んでいる。

「大変だ！ ウゴの奴がアカデミーに大勢の仲間と一緒に来ている。ヒクソンと闘わせろと言っているんだ」

ヒクソンはパンツ一丁のまま部屋を飛び出した。髪の毛もボサボサのままだった。仲間が運転するバイクに跳び跨って、急いでグレイシー・ウマイタ（グレイシー柔術の本部道場）へと向かった。

ヒクソンが着くと、アカデミーの周りには500人ほどの人ばかりができていた。尋常な雰囲気ではなかった。そのうちの40、50人はファイターたちだったが、それ以外はギャングと野次馬である。スカーフを顔に巻き、目の部分だけを切り開けている者も大勢いた。銃を持っている者も何人もいる。

ヒクソンは人混みをかきわけるようにしてアカデミーに入っていく。門を潜り階段を上りかけたところでウゴと鉢合わせになった。

ウゴは上から睨みつけるようにしてヒクソンに言った。

「待ってたぞ。お前と闘いに来たんだ。今日こそ俺が勝って、決着をつけてやる」
ヒクソンは鋭い視線を向けてウゴに言った。

「来い！」

そしてアカデミーの外にある広い駐車場へ連れていく。

ヒクソンは異常な雰囲気警戒した。

ウゴと闘うのはいい。でも、これだけの人数がいて、その中には銃を持っている者もいるとなれば、死人が出るような大変な事態にもなりかねない、と思ったのだ。

駐車場の隅にウゴを連れていったヒクソンは一緒に来ていたデニユールソンとエウジーニョ・タデウ（ルタ・リーブリの選手）を呼び寄せた。すぐにエリオとホイラーが加わる。そこでヒクソンは強い口調でルタ・リーブリ側の3人に向かって言った。

「ウゴが闘いたいというのなら、この場で挑戦を受けよう。だが、もしこの現場がコントロールできないような状況になったら、その時は、俺はお前たちを殺す。いいな、必ず探し出して殺すぞ。俺とウゴの闘いに絶対に誰にも手を出させるな！　そして、この場で誰にも銃を使わせるな！」

黙って聞いていたウゴたちは、「わかった」と答えた。

群衆が取り囲む中、そのアカデミー横の駐車場でヒクソンとウゴは闘った。

晴れていて、とても暑い日だった。ヒクソンもウゴも額に薄っすらと汗を浮かべている。先に動いたのはウゴだった。いきなり殴りかかるが、その動きにヒクソンがカウンターで胴タツクルを決める。一発でテイクダウンに成功したヒクソンは、そのままマウントポジションを得ていた。

一週間前のビーチでの闘いと同じようにヒクソンは拳をウゴの顔面に落としていく。ウゴはパンチを防ごうとしてヒクソンの胴体に抱きついた。

叫び続ける者はいたが、誰も闘いに対して手を出す者はいない。エリオとデニユーンは静かに2人の闘いを見守っていた。

胴体に抱きつかれたヒクソンは、すぐさま攻撃に出る。それは非情な攻めだった。ウゴの頭部を持ち上げて、そのまま後頭部を地面に叩きつけたのである。リングなら下はマットだが、ストリートではコンクリートだ。多大なダメージを負ったウゴは、ヒクソンの胴体から手を放す。するとヒクソンは間髪を容れず顔面に拳を叩き込んだ。2発、3発、4発、5発と見舞っていく。ウゴはタツプをして負けを認めた。ストリートファイトだから正確なタイムは残っていない。ただビーチでのファイトよりも早い、わずか2、3分での決着だった。

ヒクソンがウゴに勝った後、もう一つ騒動が起こった。すぐ近くでホイラーとエウジーニョがいまにもつかみ合はんばかりの表情で睨み合い、何かを怒鳴り合っていた。

その時である。ダダダダダダ……と激しい銃声が響いた。と同時にヒクソンとウゴを取り囲んでいた者たちが散っていった。警官が駆けつけて空に向かって発砲したのである。これがヒクソンにとってのリオ・デ・ジャネイロでの最後のストリートファイトとなった。

ホリオン・グレイシーの挑戦

ウゴを倒し、ルタ・リーブリとの抗争に決着をつけた後、ヒクソンはカリフォルニア州ロスアンジェルス近郊に移り住む。ここでは、ストリートファイトは、ほとんどやっていない。

「一度だけあったかな。でも、それは大したファイトではなかった。カラダの大きいタフな男が相手だったが、アッサリと私が勝ったよ」

ヒクソンは、そう話していた。

ストリートファイトの機会はなくなった。しかし、その代わりに数え切れないほどの「チャレンジマッチ」をヒクソンは、この街で闘うことになる。

ヒクソンの兄であり、グレイシー兄弟の長男ホリオン・グレイシーは、80年代後半に、すでに米国に移住していた。大学を卒業し、その後、法律学校にも通い弁護士の資格も取

得していた彼には、ブラジル国内だけではなく米国にもグレイシー柔術を広めるという夢があった。ロスアンジェルズ近郊の街ハモサビーチに部屋を借り、その建物のガレージに道場をつくっていたのだ。

だが、道場生を集めるのは簡単ではなかった。何しろ、グレイシーの名はリオ・デ・ジャネイロでは知られていたとはいえ、米国では、誰も知らない。周囲には空手やテコンドールの道場があり流行っていたが、ホリオンのもとを訪れる者はほとんどいなかった。

ホリオンは振り返る。

「最初は道場と呼べるようなものではなかった。借りた家のガレージにマットを敷いて練習を始めたんだ。手書きでつくったチラシを配ったり、街で出会った人に声をかけたりしているうちに道場生は少しずつ増えてはいったが、その数は少なかった。柔術を教えるだけでは生活ができなかったんだ。だから夜はレストランで皿洗い、昼間は俳優や女優といった金持ちの家の清掃のアルバイトもやったよ」

本当は柔術を教えることだけで生活をしたい。そうでなければ、グレイシー柔術を全米に広めることなどできないだろう。でも生活することを考えるとそうはいかない。悩み続けていたホリオンは、ある時、良いアイデアが浮かんだ。それはカラダがガツチリとした一人の男がガレージにやって来た時のことだった。

入門希望者かもしれない。ホリオンは、そう思い笑顔で応対した。だが、そうではなか

った。

男はランファ・アレグリアという名のキックボクサーで、ホリオンに向かって^{からか}擲^ち揄^ういの笑みを浮かべながら、こう言った。

「グレイシー柔術って何だい？ マーシャルアーツの一種かい？」

最初、ホリオンはグレイシー柔術について真面目に説明していたが、相手は真剣に聞くとはしていなかった。それに気づいてホリオンは言った。

「じゃあ、ここで闘ってみようか。そうすればグレイシー柔術とは一体何かを、よく理解してもらえと思う」

相手の男は、「面白いね」と言っ^て椅子から立ち上がった。そして、ホリオンにこう質問した。

「俺は今日、ボクシンググローブを持ってきていない。ということは、素手の拳であなたの顔を殴りつけることになるが、それでもいいか？」

ホリオンは「OKだ」と答える。

すると、こうも言った。

「後で訴訟を起こされても困るから、『怪我をしても一切の文句は言わない』と一筆書いて欲しい」

近くにあった紙切れに簡単な取り決め文を書き互いにサインをすることを提案する。弁

護士の資格を持つホリオンにとって、簡単な誓約書をつくるのは、お手のものだった。

それからは2人は上半身裸になって闘った。

体格的には相手の方が優っていたが、ホリオンは十分に勝つ自信を持っていた。

まず相手が右ローキックを蹴ってきた。それをホリオンがかわすと、相手は続けざまに右のパンチを放った後、左ミドルキックを繰り出してくる。そこをホリオンは見逃さず、タツクルに入り寝業へと持ち込んだ。相手はキックボクサーであり、グラウンドでの攻防には慣れていない。マウントポジションを奪ったホリオンは素手で顔面を殴りつけ、その直後に相手の左腕を抱え、そのままアームバー（腕挫ぎ十字固め）を決めた。男はたまらずタツプ。30秒ほどで決着はついた。

ランファ・アレグリアは言った。

「俺の負けだ。でも、この結果は偶然だと思う。もう一度、闘ってくれないか」

ホリオンは、この申し出を受け入れて、もう一度闘った。結果は同じだった。ホリオンが再びグラウンドの展開へと持ち込み、今度はチョークスリーパーを決めてアレグリアを失神させる。敗北を認めたアレグリアは、その日のうちにホリオンの生徒となった。

ホリオンに良いアイデアが浮かんだのは、この時である。

（そうだ。チャレンジャーを求めよう。そして俺が実際にチャレンジャーと闘う。そうすることで 그레이シー柔術の有効性も手っ取り早く理解してもらえらる）

ホリオンの動きは早い。すぐに行動した。

まず、チラシをつくった。

「グレイシー柔術は最強だ！」とコピーを打ち、そこに、「この言葉に異論があるならかかって来い。私のガレージでノールールで闘おうじゃないか」と書き加えた。

このチラシを街中に貼ったのだ。

それだけではない。全米で売られている格闘技専門誌『BLACK BELT（ブラックベルト）』にも広告を出した。

「挑戦者求む。最強のグレイシー柔術にかかって来い！」と。

挑発的なフレーズを並べるとともに、勝者には賞金を用意するとも記した。

反響は凄まじかったとホリオンは言う。

「それは、ブラジルでもやっていたグレイシーチャレンジと同じだった。グレイシーチャレンジを毎週末に行い、多くの挑戦者を迎えた。皆はガレージファイトと呼んでいたよ」

そんな頃である、ヒクソンが米国に移住したのは。一人や2人ではない。多い時には何十人もが、「グレイシーとかいいう生意気な奴をこらしめてやる」と意気まいて、或るいは賞金目当てにガレージにやって来た。

ここで、ホリオン、ヒクソン、そしてヒクソンを追って渡米してきたホイラー、その弟のホイースが順番にチャレンジヤーたちと長き間、闘い続けたのだ。挑戦者の中には空手や

キックボクシング、テコンドーの道場主たちもいた。

だが勝つのは常にグレイシーファイターだった。最後は必ず、サブミッションかチョークで決める。徐々に増え、かなりの数になった道場生たちが周囲では見守っていた。チャレンジャー全員に勝利した後、皆の前でホリオンは常に、こう口にした。

「いいかい。私たち兄弟が強いんじゃない。私たちの父エリオがつくり上げたグレイシー柔術の技術が優れているのさ」

チャレンジに訪れた者が、そのままグレイシー柔術の門下生となるケースも多々あった。また苦しかった時期にホリオンが生活を支えるためにやっていたアルバイトも、グレイシー柔術の繁栄に繋がっていく。俳優、女優たちのハウスキーパーを務めていたことが縁で、ホリオンはハリウッド映画にエキストラとして出演するようになり、その後、俳優としてテレビドラマや映画に、自らの名をクレジットされるようにもなる。

俳優として初めて出演したのは全米で人気を博したテレビドラマシリーズ『刑事スタスキー&ハッチ』だった。その後、映画『リーサル・ウェポン』にも悪役で登場している。

ホリオンは俳優になるつもりはなかった。だが、ハリウッドと関係を築いたことで有名スターたち、あるいは有名スターの家族たちが護身術を学ぼうとガレージを訪れるようになった。そのことをホリオンは喜んだ。有名スターが通っているとの評判が立つことで、さらに道場生の数は増えた。徐々に道場は拡張され、現在カリフォルニア州トランスに

ある2階建ての『グレイシー柔術アカデミー』が設立されるに至るのである。

「アルティメット大会」の衝撃

道場の運営は順調だった。

だが、そのことにホリオンが満足してはいたわけではない。カリフォルニア州で道場が流行ったとしても、グレイシー柔術の名が全米に広まったわけではないのだ。

そこでホリオンが、ガレージファイトの延長線にあるものとして計画したのが、UFC（アルティメット・ファイティング・チャンピオンシップ）の開催だったのである。スタート当時、日本では「アルティメット大会」と呼ばれていた。

ホリオンは、ハリウッドの映画界とのパイプも活用した。UFC開催を決めた後、『ビツグ・ウエンズデー』や『若き勇者たち』などの作品で有名な映画監督ジョン・ミリアスに闘いの舞台について相談を持ちかける。そこでジョン・ミリアスが考案したのが金網に囲まれた八角形のリング——オクタゴンだった。

さまざまな苦難はあったが、UFCの開催が決まる。そこでホリオンたちは、決めなくてはならない一つのこととに直面する。

グレイシー柔術を代表して誰がUFCのトーナメントに出場するかである。

兄弟の中で一番強いのは明らかにヒクソンだった。そのことは父エリオも、また、すべての兄弟たちも認めていた。ヒクソンはUFCのトーナメントに出場したいと考えていたことだろう。しかし、ホリオンは、こう提案した。

「ホイスを出場させようじゃないか」

ホリオンには、UFCを成功させ、そこでグレイシー柔術の名を一気に世界に広めるための作戦があった。だから、こう続けた。

「兄弟の中で一番強いのはヒクソンだ。でも、そのヒクソンが最初から出ていく必要はない。ホイスもかなり強くなっている。最初にホイスが出ていく。おそらくホイスはトーナメントで優勝するだろう。だが万が一、ホイスが負けるようなことがあれば、その時はヒクソンが出ていく。この2段階構えが最良の策ではないだろうか」

このホリオンの提案に父エリオが同調した。

「それでいこう」

エリオがそう口にしたことで、ホイスのUFC出場が決まったのだ。ヒクソンは、エリオ、ホリオン、ホイラーらとともに「グレイシートレイン」を組み入場し、ホイスのセコンドにつくことになった。

だがホリオンの策略は、それだけでもなかったように思う。

ホイスはUFCの第1回大会、第2回大会のトーナメントを連覇。これによりグレイシー

柔術の名は世界に広まることになったのだが、もし、ヒクソンが出場していたら、どうなっていただろう。おそらくはアツサリと勝利を重ね連覇を果たしていたことだろう。グレイシーが勝利を収めるという意味では同じだ。

だが、ヒクソンの闘いにはエネルギーなオーラが宿る。対してホイスには、それが無い。そのことをホリオンは考えたのではないだろうか。

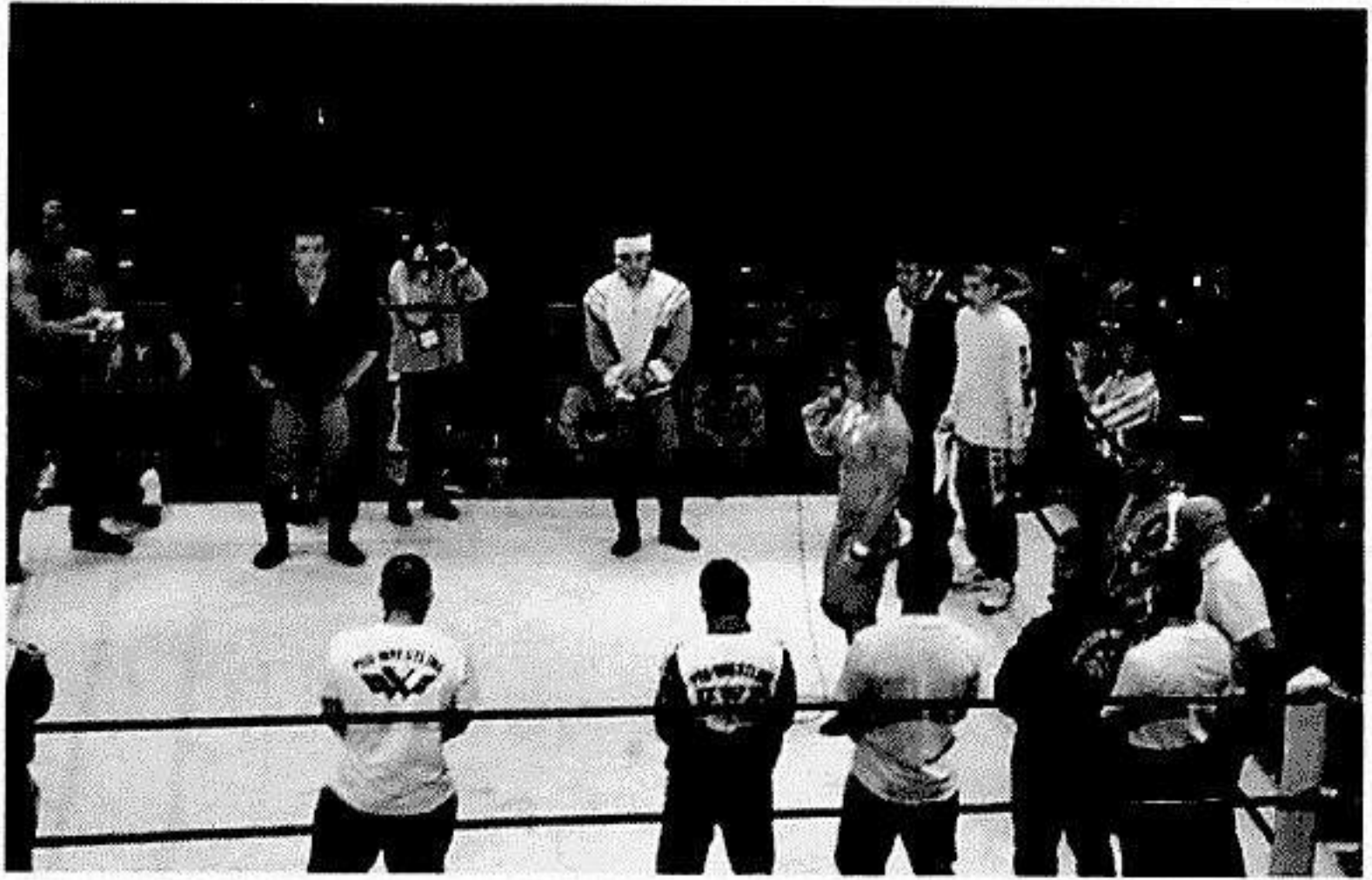
ホイスは身長こそ高いが体重は軽く、見た目には「やせっぽち」である。対してヒクソンは身長こそそれほど高くはないが肉体が逞たくましい。いかにも強そうに見える男より、見かけが一般人とそれほど変わらない男が、オクタゴンという苛烈な舞台で勝った方が、グレイシー柔術の優位性を示すうえで、インパクトが強いと考えていたはずである。

ルタ・リーブリとの抗争を終え、カリフォルニア州ロスアンゼルス近郊に移り住んだヒクソンは、90年代初頭、ガレージファイトを続け、UFCでグレイシー柔術の名が世界に広まる日を待っていた。

その頃、日本では、第2次UWFが解散し、91年に高田延彦をエースとした団体、UWFインターナショナルが旗揚げされる。だが、この時はまだ、ヒクソンも高田もお互いに、後に闘うことになる相手の名前すら知らなかった。

第4章

グレイシー VS
UWFインター



「道場破りで安生惨敗」の衝撃

安生洋二がヒクソンにやられた。

その報が日本のファンに届いたのは1994年12月初旬のことだった。『PRIDE 1』が開催される約2年10カ月前のことである。

12月7日（現地時間）、当時、米国カリフォルニア州ウエスト・ロスアンジェルズにあった『ヒクソン・ 그레이シー柔術アカデミー』に、UWFインターナショナルの主力選手 の一人であった安生が赴き、道場破りを敢行する。だが、あっけなく返り討ちにされてしまった。

この事件は、プロレス界に大きな衝撃をもたらした。安生の個人的な挑戦という領域で済まされる問題ではなかったのである。ファンは、安生の敗北を、UWFインターの、また日本プロレス界の 그레이シー一族に対する敗北とのイメージを強く持ち、それがプロレス人気の低下に繋がったからだ。

ことの重大さを安生も、よく理解していたのだろう。帰国後の記者会見で、「申し訳ない」と神妙な顔で何度も繰り返していた。

だが、この直後に幾つかの噂が流れた。それは、安生は不当な闘いを強いられ、グレイ

シー側の卑劣なやり方によって敗者にされたとの主旨のものであった。

道場生たちに囲まれ身動きがとれなくなっていた安生をヒクソンが仲間たちとともに襲った。或るいは、道場生数人からも安生は攻撃を受けたといった話なのだが、この噂の出所はわからない。おそらく安生本人が口にしたものではなかっただろう。

『東京スポーツ』紙の一面、『週刊ゴング』『週刊プロレス』両誌の表紙には、顔面を血で染めて座り込んでいる安生の姿が写った写真が掲載されていた。でも闘いを写したものは一枚もない。報道陣をシャットアウトした道場で闘いは行われたのだ。実際の闘いを知るのは、ヒクソン、安生の両陣営だけである。

この噂に即座に反応したのが、総合格闘技団体である修斗だった。当時、修斗は、『バリー・トワード・ジャパンオープン』という大会を開催しており、これにヒクソンは、94年、95年と2年連続して出場し、トーナメントVを果たしている。修斗とヒクソンは密接な関係にあったのだ。

ヒクソン側も、そんな噂が流れていると知った以上、「闘いが公正なもの」であったことを証明する必要があると考えた。そこで、安生の道場破り事件から5日後の12月12日、埼玉県大宮市（現・さいたま市）にあったスーパータイガーセンタージムで一部マスコミに対して道場破りの映像が公開されることになったのである。

グレイシー一族は、その名が広く知られるようになる以前から、たびたび他流試合を行

っていた。道場破りを受け入れるだけでなく、敢えて挑戦者を募り、闘い、勝ち続けてきた歴史がある。その際には必ず闘いの模様をビデオに収録するのだが、これは勿論、負けた相手の言い訳や虚偽を防ぐためだった。当然、ヒクソンと安生の闘いも映像として残していたのだ。

「ヒクソンテープ」の中身とは？

そのビデオテープの映像は、ヒクソンと安生が向かい合っているシーンから始まった。ヒクソンはサウスポー、安生はオーソドックスに構えている。

最初に動きを見せたのは安生だった。右ローキックを放つ。だが序盤は互いに動きが少なく、多少の打撃攻防があるも睨み合ったまま1分ほどが過ぎる。2人の周囲には、十数人の道場生、そして安生に付き添っていた元プロレスラーの笹崎伸司と彼の妻がいたが、誰も声を発してはいない。道場破りならではの独特の緊張感が画面から伝わってきた。

闘いが動いたのは開始から1分が過ぎた頃だった。

安生が放ったパンチに合わせるように動いたヒクソンが胴タツクルを決める。寝業に持ち込み安生の上のった状態をつくると、そこからはヒクソンの独擅場だった。

顔面を中心にヒクソンが何十発ものパンチを振り下ろしていく。逃れることのできない

プロレスが死んだ日。
近藤隆夫・著

発行：集英社インターナショナル（発売 集英社）
定価：1,600 円（本体）＋税
発売日：2017 年 10 月 5 日
ISBN：978-4-7976-7345-6 C0095

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)